中二な世界に飛ばされて

ガスキン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
中二な世界に飛ばされて

【Ｎコード】
Ｎ５７５０Ｖ

【作者名】
ガスキン

【あらすじ】
『月満ちる夜、聖王山の池に飛び込むと、新たなる世界へ旅立つ』・・・。高校二年生の竜胆　清人は、そんな言い伝えを信じた中二病の友人に連れられ、聖王山の池に向かった。そこで池に落下した清人は、気付くと見知らぬ場所で、見知らぬ女性の前に立っていた。「我はルナトリア・ヴィ・ガリオ！　“ジェノサイド・クイーン”のソウルネームを持つガリオ王家の第一皇女である！！　救世主よ！　我と共に、この暗闇に満ちた世界を照らす一筋の光となるのだ！！」。「何という中二ワードの羅列・・・」。果たして、普通（

本人談）の人間である彼は、中二な世界で生き残れるのか・・・というか暮らせるのか？　「まあ、こうなったら覚悟を決めるか」※作者初のオリジナル連載物にして実験的な作品です。超亀更新になる事間違いないですが、それでもよろしければご一読ください。

第一話　いざ中二の世界へ

目の前で理解不能な事が起きれば、大抵の人間は固まってしまう。竜胆　清人は今正にそんな状態だった。

「我はルナトリア・ヴィ・ガリオ！　“ジェノサイド・クイーン”のソウル・ネームを持つガリオ王家の第一皇女である！　救世主よ！　我と共に、この暗闇に満ちた世界を照らす一筋の光となるのだ！！」

彼の前に立っているのは、紅蓮色の長髪に、真紅の瞳の女性だった。身長はおよそ１７０センチ後半だろうか。女性としては高めの身長だ。しかし、それより目を引くのは、彼女の全身を覆っている頑強な鎧だ。無駄な装飾を省き、機能だけを追求したその鎧は傷一つついていない。

「何という中二ワードの羅列・・・」

それを目の当たりにした清人の第一声は、そんなどうでもいいような言葉だった。

「（落ち着け俺。というか、何がどうしてこうなった・・・）」

深く深呼吸し、清人はここ数時間の出来事を一つずつゆっくりと思いだす事にした。

・・・・・・・・

・・・・・・

・・・

ここに一人の少年がいる。名は竜胆　清人。身長が同学年に比べて高めな所と、動体視力が少しいい所を覗けば、何処にでもいそうな高校二年生である。しかし、そんな平凡な彼の周りには、少々変わった人物達がいた。

「おはよう同志！　いや、“ワンハンド・トール”よ！」

朝のホームルーム前の時間、席に着いていた清人の前に、眼鏡をかけた男子生徒が立った。名を近藤　総太。ゲームオタクでフィギュアオタク。さらに、中二病という厄介なものを抱えている。

高校生にもなって中二病かよ・・・と突っ込みたくなるが、清人のクラスの約半分の男子が、未だ中二病から抜け出せないでいる。中には、高校生になって発症した猛者もいるらしい。

「おい総太。その呼び方止めろって言っただろうが」

“ワンハンド・トール”とは、総太がつけた清人のあだ名・・・・ではなく、栄光ある二つ名・・・らしい。以前、二人がグラウンド前を移動中、総太に向かって飛んで来た野球のボールを、清人が片手でキャッチした事が切っ掛けでつけられたのだ。本人は感謝のつもりらしいが、つけられた本人にとっては恥ずかしさしか湧かないものだった。

「何を言う！　せっかく、この“ダークネス・ウィザード”の天才的な頭脳を守った功績を称え、俺自らが名付けてやったというのに！」

「恥ずかしいって言ってんだよ。というか、自分で天才とか言うな」

「ふはははは！　学年トップの俺が言うのは間違っているか？」

「それが納得いかないんだよ。何でお前がトップなんだ？　いつもアニメやゲームの話しかしてないのに」

「俺に不可能は無い！　決して、成績が下がったら母さんに色々没収されるから頑張ってるわけじゃないぞ！」

「・・・・なるほど」

“母”という言葉を聞き、清人の顔が僅かに沈んだ。彼には母親はいない。いや、それどころか父親もいない。両親は清人が五歳の時、突如行方不明となったのだ。それから今まで、彼は祖父母に育てられて来た。だが、祖父母も、四年前と去年にそれぞれ他界した。現在、彼はアルバイトで必死に生計を立てながら高校に通っているのだ。

「それより同志。今日は貴様にいい話を持って来たぞ！」

「お前がそう言って今までいい事があった事は一度もない。伝説のメイドがいるとか言って街に連れ出されれば、不良の溜まり場に辿り着くし。販売中止になったゲームが密かに出回ってるとか言うのでボロボロのゲームショップに向かえば、とんでもないクソゲーつかまされただけだし。ハッキリ言って、お前の言う事は１２０パーセント当てにならん」

「そんな事あったか？」

「殴るぞ」

「冗談だ。それに、今回の話は今までの下らないものよりずっといい話なんだぞ」

「今自分で下らないって言ったな」

「いちいち突っ込むな！　いいか？　『月満ちる夜、聖王山の池に飛び込むと、新たなる世界へ旅立つ』・・・こんな言い伝えを知ってるか？」

「聖王山・・・ああ、あの中二山な」

聖王山とは、清人達の住む街のはずれにある小さな山の事である。名前がそれっぽいという事で、清人は中二山と呼んでいる。

「聖王山には確かに池が存在している。という事は・・・この言い伝えも真実だという事だ！」

「んなわけないだろうが。新たなる世界？　漫画じゃあるまいし、ありえねえっての」

「ならば！　今日の夜、俺と貴様で確かめに行こうではないか！幸い、今日は満月だ。『月満ちる夜』という条件を叶えている！」

「嫌に決まってんだろうが！　というか、俺を誘うより『中二部』の連中でも誘えよ」

「『中二部』ではない！『ラグナロク部』だ！」

『ラグナロク部』とは、総太が部長を務めている部活の名前である。そこでは、日々中二的な活動が行われているらしい。ちなみに、非公式である。

「へいへい。じゃあ、その『ラグナロク部』のヤツらを・・・」

「駄目だ！　他の同志達は、今日の深夜に放送される『キュルルン

♪　メリーちゃん』をリアルタイム観賞する為に出て来られん！」

「お前はいいのか？」

「録画しているから無問題だ！」

「はあ・・・ったく、しょうがねえな」

そこまで聞かされると、清人としては断る事が出来なかった。“困っている人がいたら、迷わず助けてあげなさい”・・・祖父母のこの言葉を実践する事を誓った彼にとって、困っている人を見捨てる事は決して許される事ではなかった。

「それでこそ同志だ！　では、今夜の十一時に、聖王山の入り口に集合だ！」

「わかった」

「いいか！　遅刻したら、我が最大魔法“ジェネシック・イグニション”をお見舞いしてやるからな！」

「そのセリフ、そっくりそのままお前に返してやる」

キーンコーンカーンコーン！

「席につけ、ホームルームを始めるぞ」

「では、詳しい話はまた後でな」

そう言って、総太は自分の席に戻って行った。担任の連絡事項を聞き流しながら、清人はぼんやりと考えていた。

「（『月満ちる夜、聖王山の池に飛び込むと、新たなる世界へ旅立つ』・・・か。言い伝えにしては子どもっぽ過ぎるな。ま、どうせガセ何だから気にするほどでもないか）」

「こら竜胆。ちゃんと聞いてるのか？」

「あ、す、すいません」

それから、あっという間に時間は過ぎ去り、今は午後１０時５０分。清人は待ち合わせ場所である聖王山の入口で、総太が来るのを待っていた。

「待たせたな同志！」

「おまっ・・・何だよその荷物」

パンパンに膨れたリュックを背負った総太に、清人は思わず目を見張った。

「旅だった世界がもし戦争中だったりした時の為に、武器を持って来た」

リュックを下ろし、中身を取り出す総太。刀や、槍、果てはマシンガンなど様々な武器が次から次へと飛び出す。

「へえ、レプリカにしては妙にリアル・・・痛っ！」

「あ、その刀本物だから」

「なっ！？　何で本物持ってんだよ！？」

「家の蔵から持ち出した。こっちの槍も本物だぞ。さすがに銃はエアガンだが、それでも、まともに当てれば骨が砕けるくらいの威力はあるぞ」

「お前・・・馬鹿だろ」

「失礼な！　用心に越した事は無いぞ！　そんな事言うんなら、お前には貸してやらないからな！」

「そんな物持ってたら銃刀法違反で捕まるわ！！」

「ふん、まあいい。それより、そろそろ出発するぞ」

武器を仕舞った総太が登山道を登り始める。その後を清人も登り始めるが。中腹までさしかかった所で、総太の歩く速度が目に見えて落ちて来た。

「ぜえ・・・ぜえ・・・ま、待ってくれ・・・・」

「バテるの早過ぎだろ。だから運動しろって前から言ってただろうが」

「う、うるさい。俺は、頭脳派なのだ」

「はあ・・・仕方ないな。そのリュック貸せよ」

代わりにリュックを背負う清人。対する総太は、息を吹き返したように登山道を走り出した。

「遅いぞ同志！　速く登って来い！」

「こ、この野郎・・・」

山頂までもう少しという所で、分かれ道があった。右へ行けば山頂。左へ行けば池に辿り着くらしい。

「もうすぐだな」

「そういえば、池の方に行くのは初めてだな」

「俺もだ」

やがて、二人の前に大きな池が見えて来た。底が見えるほど透き通った水面に、大きく満月が映っている。

「・・・・すげえ」

あまりに美しい光景に、清人は目を奪われていた。

「さあ、いよいよ新たな世界に旅立つ時が来た！　さあ！　飛び込むのだ！」

「誰が？」

「もちろん、貴様だ同志」

「・・・・は？」

「さあ！　勇気を持って飛び込むのだ！」

「ちょ！　押すな・・・って、うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

バシャアァァァァァァァァァァァァァァン！！

背後から突き飛ばされ、清人は勢いよく池に飛び込んだ。

「どうだ！？」

十秒・・・二十秒・・・三十秒・・・・いつまで経っても清人は上がって来なかった。

「こ、これは・・・まさか、本当に別の世界に行ってしまったのか！？」

震えだす総太。自分のしでかしてしまった事の大きさに気付いた・・・・わけではないようだった。

「素晴らしい！　これぞ、俺が求めていたものだ！　待ってろよ同志！　すぐに俺も行くからなぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

バシャアァァァァァァァァァァァァァン！！

意気揚々と飛び込む総太。だが、いつまで経っても彼が別世界に移動する事はなかった。

「何故だ！？　何故俺は行けないんだ！？　まさか、選ばれた者しか行けないのか！？　同志！　同志ーーーーーッ！！！」

雲一つない満月の空に、総太の声が響いた。

・・・・・・・

・・・・・・

・・・

「（そうだ。俺は、総太の馬鹿に突き飛ばされて、池に飛び込んだんだった。でも、周りには池なんて見当たらないし・・・まさか、本当に別の世界に飛んでしまったのか！？）」

「どうした救世主よ？　何をそんなにキョロキョロしている？」

一言もしゃべらないのを怪訝に思ったのか。ルナトリアと名乗った女性が尋ねて来た。

「えっと・・・その・・・ちょっと聞きたい事が・・・」

「何だ？　我に答えられる事なら何でも・・・っと、どうやらその前に片づけなければならないものがあるようだな」

「え？」

「プギャアァァァァァァァァァァ！！」

清人が聞き返そうとしたその瞬間、二人の周りに小さな人型の何かが現れた。豚の顔に、人間の体を持つ、この世界で“オーク”と呼ばれる魔物だった。

「な、何だよこいつら！？」

「何？　オークを知らないのか？」

「オーク！？　オークってあのゲームとかに出て来るオーク！？」

「その“げえむ”とかいうものはわからんが、オークはオークだ」

「プギャアァァァァァァァァァァ！！」

無視されて怒ったのか、オーク達が武器の棍棒を振り上げながら二人に向かって襲い掛かった。

「ど、どどどどうすれば・・・・！」

「ふん、オークごとき下賤なモンスターが、我に触れるなど笑止千万！　この“ジェノサイド・クイーン”の力を見せてやろう！」

そう言うと、ルナトリアは背負っていた大剣をゆっくりと引き抜いた。刀身から何から全てが赤く染められ、柄の中心部にはこれまた真っ赤な宝石がはめられていた。

「我がソウル・ウェポン・・・『ヴォルケイノ・ブレイズ』の切れ味、その身で味わえぃ！！」

力任せに『ヴォルケイノ・ブレイズ』を薙ぐルナトリア。その途端、刀身から激しい炎が噴き上がり、三匹のオークを一瞬で火達磨にした。

「ほ、炎！？」

「我が『ヴォルケイノ・ブレイズ』は炎を司るソウル・ウェポン。いかなる存在だろうと、跡形もなく燃やしつくしてくれる！」

「ソウル・・・ウェポン？」

「さあ、次に焼け死にたい者はどいつだ！」

「プギャアァァァァァァァァァァ！！」

ルナトリアを脅威と感じたのか、残りのオーク達が一斉に彼女を取り囲んだ。ルナトリアは不敵な笑みを浮かべていたが、さすがに多勢に無勢ではないだろうか。

「ふん、少しは知恵が回るようだな・・・だが！」

「プギャアアアアアアアアアアア！！」

「なっ！？　くっ、目が・・・・！」

一匹のオークが、彼女に向かって大量の砂を投げつけた。目に砂が入り、ルナトリアの視界が潰れる。

「（マズイ！　何とか・・・何とかしないと・・・・！）」

焦る清人の手に何かが触れる。それは、リュックから飛び出していたマシンガンだった。

≪銃はエアガンだが、それでも、まともに当てれば骨が砕けるくらいの威力はあるぞ≫

「（そうだ、これなら、倒す事は出来なくても時間稼ぎくらいは・・・・）」

そう考え、慌ててマシンガンを構える清人。すると、彼の頭に自分ではない誰かが語りかけて来た。

≪呼んで・・・名前を≫

「（だ、誰だ！？）」

≪呼んで・・・名前を。ソウル・ウェポンとして、新たに生まれ変わる為に≫

「（まさか・・・このマシンガンか！？）」

≪呼んで・・・名前を・・・ソウル・ネームを・・・・≫

「プギャアァァァァァァァァァァ！！」

「くっ・・・」

視線の先では、今正にオーク達がルナトリアに飛びかかろうとしている。迷っている時間などなかった。

「ああくそ！！　呼んでやるよ！！　お前の名前は・・・“サウザンド・インパクト”だ！　わかったらさっさと力を貸しやがれぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！」

≪ソウル・ネームを確認。これより“サウザンド・インパクトは”マスターのソウル・ウェポンとなります。いかなる敵が立ち塞がろうと、千の衝撃で全て撃ち抜いてみせましょう≫

「伏せろぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！」

「ッ！」

ルナトリアが地に伏せる。それと同時に、清人はマシンガンの引き金を引いた。

ドガガガガガガガガ！！

「うおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！」

毎秒数十発という凄まじい速度で放たれる大量の弾丸が、瞬く間にオーク達をハチの巣にしていった。

「お、終わった・・・のか？」

全てのオークが倒れたのを確認して、清人はマシンガンを下ろした。心臓は激しく動き、全身から汗が吹き出る。

「何という威力・・・それが救世主のソウル・ウェポンなのか？」

「え、あ、はい。一応そういう事にさっきなりました」

「何にせよ、我はそなたに救われた。救世主よ、これより我と共にガリオの城に来るがよい。救われた礼をさせてもらう」

「い、いや、俺は・・・」

「聞きたい事があるのだろう？　城でゆっくり話でもしようじゃないか」

最早、別の世界にやって来てしまった事は確実だった。ならば、少しでも情報を集めた方がいい。そう結論づけた清人は、ルナトリアの誘いに乗る事にした。

「・・・わかりました。それじゃあ、お世話になります」

「うむ。では我の後について来るがよい」

リュックを背負い直し、清人はルナトリアの後について行った。

第一話　いざ中二の世界へ（後書き）

どうも、ガスキンです。今回、初めてのオリジナル小説を書く事にしました。正直、見切り発車も甚だしいのですが、どうか温かい目で見守って頂けたら嬉しいです。

第二話　状況確認と勘違い

ルナトリアと共に道を進む事数十分。清人は教科書に出て来るような巨大な城の城門の前に立っていた。

「ここがガリオ城だ」

「でけえ・・・」

城を見上げながら感嘆の息を漏らす清人。すると、城門の上の見張り台のような場所から兵が大きく叫んだ。

「ルナトリア様がお戻りになられたぞ！　開門！」

重々しい音と共に、城壁が左右にゆっくりと開いて行く。完全に開き切る前に、ルナトリアは歩き出した。

「我は、これから父上と母上に報告して来る。そなたはしばらく客室で待っていてくれ」

「わ、わかりました」

「誰かあるか！」

「ルナトリア様！」

一人の男性が二人に近づいて来た。他の兵と比べ、上等な鎧を纏っている。明らかに只者ではなさそうだ。

「おお、マードック将軍。丁度いい、そなたに任せる」

「ルナトリア様、まさかこの方は・・・」

「そうだ。救世主だ」

「やはりそうでしたか！　これで、ガリオ王国も救われますな！」

「ルナトリアさん、この人は？」

「この男はマードック・フライト将軍。“ギガント・ブレイカー”のソウル・ネームを持つ、ガリオ王国随一の豪傑だ」

「マードック・フライトと申します！　こうして救世主様にお会い出来た事を光栄に思いますぞ！」

「は、初めまして。竜胆　清人です」

「リンドーキヨト？　それが救世主様のお名前ですかな？」

「こっちの言い方だと、多分キヨト・リンドーになると思いますけど」

「そういえば、そなたの名前を聞くのを忘れていたな。そうか、キヨトというのか」

「ルナトリア様、名前を尋ねるのは一番最初にする事ですぞ」

「むう、だが、あの時はオーク共に襲われてそんなヒマもなかったからな。まあいい、それよりマードック。キヨトを客室まで案内してやってくれ」

「承知したしました。では、キヨト様、手前がご案内させて頂きます」

「お願いします」

マードックに案内され、清人は城の三階にある客室へ通された。室内には、見るからに高そうな絵画や置物が並べられていた。

「では、手前はこれで」

一礼し、マードックは扉の向こうへ消えていった。清人はリュックを下ろし、ベッドに腰掛けた。上質な羽毛で作られているのか、座った途端大きく沈みこむ。

「広いな。俺が住んでたアパートの部屋の二倍・・・いや、三倍はあるか」

清人は自分でも驚くくらい落ち着いていた。この年になるまで、様々な出来事を体験して来たせいか、一度己の状況を理解すると、瞬く間に順応してしまう性格になってしまったのだ。今のセリフは、正にその表れだ。最も、それは肉親との別れで得た、あまりいいと思う様なものではないのだが。

「質問の整理でもするか。えっと・・・まずは、ここは何処かだろ。次に、俺を救世主と呼ぶ理由。それと、ソウル・ネームとかソウル・ウェポンとかいう中二ワードの意味。それから・・・」

清人は質問を考えながら時間を潰していった。それから約三十分後、清人は再びマードックに案内され、今度は玉座の間に連れて行かれた。

「お主がキヨト・リンドーかね？」

王冠を被った初老の男性が、柔和な表情を浮かべながら清人に名を尋ねる。彼こそ、このガリオ王国国王であり、かつて、“プロミネンス・カタストロフィ・インペリアル”として、ガリオ王国に迫る様々な魔物を自らの手で撃退し多くの民を救って来た、カイオス・ヴィ・ガリオだった。

「は、はい！　俺・・・じゃなくて、私が、キヨト・リンドーです・・・でもなくて、あります！！」

高貴なる者の持つ独特な雰囲気に呑まれ、清人はつまりながらも何とか答えた。

「ふふ、そんなに緊張しないで。あなたの話しやすいようにして構わないのですよ」

その隣に座った妙齢の女性が、口元に手を当て、上品に微笑みながら清人に話しかける。彼女はシルヴィア・ヴィ・ガリオ。“アブソリュート・アイシング・レディー”のソウル・ネームを持つガリオ王国の現王妃である。

「お話はルナトリアから聞きました。キヨト様、娘の危機を救って頂き、ありがとうございます。王妃として、そして母として、深く感謝いたします」

そう言って、シルヴィアは清人に頭を下げた。周りの臣下達が僅かにざわめく中、一番驚いたのは、清人自身だった。

「そ、そんな！　むしろ最初に助けてもらったのは俺の方で・・・俺はただマシンガンをぶっ放しただけですし！　と、とにかく！俺みたいなヤツに頭を下げる事ないですよ！！」

「謙遜するな。あの時、確かに我はそなたに救われたのだぞ」

その時、玉座の背後の天幕が開き、そこから三人の女性が姿を現した。一人はルナトリアだが、残りの二人は初めて見る女性だった。

「ルナトリア・・・さん？」

ルナトリアは、先程までの鎧ではなく、真っ赤で豪奢なドレスに身を包んでいた。肘まで伸びた手袋が、いかにも姫様っぽい。

「いくら我とて、このような場所でまで鎧を纏ったりはせんぞ」

「そ、そうか。そうですよね」

「まあ、出来る事なら今すぐ脱ぎ去りたいのだがな」

「ぶっ！？」

「もう、ルナお姉様！　二人だけで仲良く話してないで、エミリィとクレアお姉様にも紹介してよ！」

「ん、おお、すまんすまん。キヨト、この二人は我の妹のクレアとエミリエッタだ」

「第三皇女のエミリエッタ・ヴィ・ガリオだよ！　ソウル・ネームは“プリンセス・オブ・リヴァイアサン”！　よろしくね！」

「第二皇女のクレア・ヴィ・ガリオと申します。ソウル・ネームは“シャイニング・ティアーズ・エンプレス”です」

「キヨト・リンドーです」

「さてキヨト、ようやくそなたと腰を据えて話が出来そうだ。そういえば我に聞きたい事があったのだろう？　言ってみるがよい。我に答えられる事なら何でも答えてやろう」

「えっと・・・まず、ここは何処ですか？」

「ここは、『ノスタルジア』の西に位置する『ガリオ王国』だ」

「ノスタルジア？」

「この世界の名前だよ」

エミリエッタが代わりに答えた。やはり、ここは異世界だった。自身で結論付けていたが、こうハッキリと言われるとやはりショックだった。

「わかりました。それじゃあ、次は、ルナトリアさん達が俺の事を“救世主”と呼んでいる事についてなんですが・・・」

「ん？　そなたは救世主なのだろう？」

「何故俺だって事になるんですか？」

「言い伝えだ」

「言い伝え？」

「ノスタルジアが闇に包まれし時・・・彼の者、光を取り戻す為、“グロリアス・ゲート”をくぐり、この世界へと顕現する。我はその言い伝えを信じ、毎日のようにあの場所へ出向いていた。そして今日、とうとうそなたが現れたのだ」

「あの場所って・・・俺とルナトリアさんが出会った場所ですか？」

「あそこは『英雄の広場』といい、かつては聖なる気が充満し、美しい草花が生い茂っていた。それが今や、オーク等のモンスターの縄張りとなってしまっている」

「何でそんな事に？」

「わからん。数年前より、突如モンスターが凶暴化・大量発生し、我が国だけではなく、他国にも被害が及んでいるのだ。このモンスターの変化こそが、ノスタルジアを包む闇だと我は思っている。しかし、我はそなたと出会えた。救世主であるそなたと力を合わせれば、必ずやモンスター共を滅する事が出来るだろう！」

「・・・・ルナトリアさん。大変申し上げ難いんですけど」

「何だ？」

「俺は・・・救世主なんかじゃありません。ただの一般人です」

「え・・・・？」

呆けるルナトリア。だが、すぐに平静を取り戻し、口を開く。

「な、何を言っているのだ。現にそなたは・・・」

「俺のいた所にも言い伝えがあったんです。『月満ちる夜、聖王山の池に飛び込むと、新たなる世界へ旅立つ』っていうのが。俺は、友達とそれを確かめようとして池に落ちて、こっちの世界にやって来たんです。おそらく、その池が“グロリアス・ゲート”とか言うヤツだったんでしょうけど。だから、俺がこの世界に来たのはただの偶然なんです」

「し、しかし、そなたはソウル・ウェポンを持っていたではないか！」

「あれは俺の物ではありません。その友達の物です」

「そんな・・・そんなはずは・・・・！」

「落ちつきなさいルナトリア」

取り乱しかけたルナトリアを、シルヴィアが治めた。

「救世主であろうとなかろうと、キヨト様はあなたの恩人。それを忘れてはなりませんよ」

「母上・・・」

「ごめんなさいキヨト様。他に聞きたい事はあるかしら？」

「ずっと気になってたんですけど、そのソウル・ウェポンって何なんですか？　それと、ソウル・ネームっていうヤツも」

「ソウル・ネームとは、その名の通り魂の名前です」

「それは普通の名前とは違うんですか？」

「ええ、ソウル・ネームはその者の能力を表したものです。例えば、私は“アブソリュート・アイシング・レディー”というソウル・ネームを持っていますが。キヨト様、このソウル・ネームを聞いてどのようなイメージが湧きましたか？」

「えっと、氷・・・ですか？」

「その通りです。私は氷魔法を得意としています。全盛期より力は下がっていますが、それでもその気になればこの城全体を一瞬で凍らす事も出来ますよ」

「ッ！？　そ、それは何とも・・・凄いですね・・・・」

「次にソウル・ウェポンですが。これは、一定以上の力を持った者だけが得る事の出来る武器の事です。元々強力な武器ですが、その真価は、持ち主によってソウル・ネームを与えられる事によって最大限に発揮されるのです」

「ソウル・ネームを与える？」

「そうです。それによって、ソウル・ウェポンはいかようにも形を変えるのです。剣になったり、斧になったり、中には本になったソウル・ウェポンもあるそうです」

「本って・・・もしかして、凄い魔法が載ってたりしたんですか？」

「いえ、殴るのに使っていたそうです」

「本の意味ねえじゃん・・・」

「もういいかしら？」

「最後にもう一つだけ・・・俺は元の世界に帰れますか？」

「それは・・・」

言い淀むシルヴィア。それが答えだった。

「無理なんですね」

「・・・ごめんなさい。私にはわかりません」

「それじゃあ仕方ありません。どうにかこの世界で生きていくしかないみたいですね」

あっけらかんとそう言う清人。これは誰の所為でもない。強いて言

うなら、池に落ちてしまった自分が悪いのだ。

「帰る方法はこちらで調べる事にしよう。その間、好きなだけここにいてくれて構わんよ」

「いいんですか？」

「礼と謝罪の意味も込めて受けて欲しい」

「ありがとうございます。では、お世話になります」

こうして、清人はしばらくの間、ガリア城で世話になる事になった。

「キヨトは・・・救世主ではない・・・・」

そんな中、悲しげに自身を見つめるルナトリアの視線に、清人が気付く事はなかった。

第三話　彼女の思い

清人がノスタルジアに飛ばされて三日が過ぎた。未だ帰る方法は見つかっていない。ちなみに、最初に通された客室がそのまま彼の部屋となっている。

「散歩でもするか」

城内を歩く事を許されているので、清人は部屋を出た。お気に入りの場所である中庭を目指し、長い廊下を歩く。

「ッ・・・・！」

「ルナトリアさん、おはようございます」

一階に降りた所で、前方から向かって来るルナトリアに出会った。

「し、失礼する・・・」

気まずそうに顔を背けながら、ルナトリアは足早くその場を立ち去る。清人に救世主である事を否定された時から、彼女の態度は、どこかよそよそしくなっていた。

「そんなにショックだったのかな？　けど、なんでそこまで救世主にこだわるんだ？」

その事を疑問に思いつつ、清人は中庭へと向かった。

「あ、クレアさん」

中庭には、美しい花がたくさん咲いている。その花達の中心に、スカイブルーの髪に、青いドレスを纏った第二皇女・・・クレアがいた。

「その声は・・・キヨトさんですね」

「よくわかりましたね」

「ええ。目は見えませんが、その分耳がいいんです」

実は、クレアは盲目だった。幼い頃高熱を出し、その所為で両目の光を失ってしまったそうだ。一応、治す事は可能らしいが、それには特殊な薬の材料が必要らしい。

「昨日もお会いしましたね。もしかして、ここが気に入られましたか？」

「はい。こういう綺麗な物を見ると落ち着くんです。クレアさんも、花好きなんですか？」

「目の見えない私でも、花の香りは楽しむ事が出来ますから。それに、鳥達のさえずりも・・・」

チュンチュン！

「・・・・ほらね？」

「はは、そうですね」

陽の光を浴びながら、二人はとりとめもない会話を楽しんでいた。すると、いつの間にかルナトリアについての話となっていた。

「そういえば、ルナお姉様のご様子はどうでした？」

「相変わらずです。さっきも会ったんですが、すぐに行ってしまいました」

「ごめんなさい。ルナお姉様に悪気はないんです。ただ・・・ルナお姉様にとって、救世主というのは特別なものなんです」

「何でなんですか？」

「それは、私の口からは言えません。ルナお姉様に直接お聞きになられてください」

「いや、ルナトリアさんに直接ってのは難しいと思うんですけど」

「でしたら、お母様にお聞きになられたらどうですか？」

「お母様って言うと・・・シルヴィア王妃ですか？」

「はい。きっと答えてくれると思いますよ」

「わかりました。機会があったら聞いてみます」

その時、一人のメイドがやって来た。

「クレア様、そろそろお部屋にお戻りください」

「わかりました。ではキヨトさん、私はこれで」

「お話楽しかったです」

「ふふ、私も楽しかったですよ」

最後に微笑み、クレアはメイドに支えられながら中庭を去って行った。それを見送った清人も、とりあえず自室へ戻った。

「さてと、どうしようかな」

なんの気なしに部屋を見渡した清人の目に、リュックが映った。マシンガンを取り出した今も、パンパンに膨らんでいる。

「そういえば・・・この中何が入ってんだ？」

気になった清人は、リュックの中身を全部出してみる事にした。

「これが槍か・・・」

まず出て来たのは、柄の部分が伸び縮みし、長い穂先の脇に、二枚のウイングがついた槍・・・清人の世界でコルセスカと呼ばれていた物だった。

「これも本物かよ。それと・・・刀、っておい！　鞘あるじゃねえか！　何で抜き身で放り込んでんだよ！」

次に出て来たのは、清人の指先を切った刀と、それを仕舞う鞘だった。光る刀身に、清人の顔が映る。

それからも、リボルバー式のハンドガン、ナイフに三節昆、トンフ

ァーにヌンチャク、果ては忍者が使う様な手甲鉤や、どうやって入れたのかわからない巨大な弓まで、次から次へと出て来る。纏まりが全然ない。おそらく手当たり次第に入れたのだろう。

「総太のヤツ、これ全部使うつもりだったのか・・・。ん？」

リュックの底に四角い箱を見つけた。中を見ると、全身を銀色に塗装されたロボットのプラモデルが梱包材に包まれていた。

「これって・・・『カイゼルファイター』のプラモじゃないか」

カイゼルファイター・・・総太が自身のバイブルとまで言っていたロボットアニメの主役機だ。『カイゼルウイング』で空を駆け、右手に持つ『カイゼルソード』と、左手に持つ『カイゼルライフル』であらゆる敵を粉砕する無敵のロボット！　とは総太の談である。清人自身も、このアニメにはまっていた。

「何でプラモなんか・・・」

コンコン

その時、誰かが部屋をノックした。

「あ、どうぞ」

「失礼しますね」

「お、王妃様！？」

入って来たのは、シルヴィア王妃だった。王妃は、室内に広がった武器を見て、驚きの表情を浮かべた。

「まあ・・・これが全て、キヨト様のソウル・ウェポンなのですね」

「す、すみません。散らかしてしまって」

「いいのよ。ここはあなたの部屋なのですから。ちょっと見せてもらってもいいかしら」

「いいですよ。けど、刃は本物ですから気をつけてください」

王妃は興味深そうにトンファーを手に取った。

「変わったソウル・ウェポンね。それとこっちは・・・凄く精巧に作られてるわね。鎧を纏った兵士の彫像かしら？」

『カイゼルファイター』のプラモを勘違いする王妃。確かに、見よ

うと思えばそう見える。

「やっぱり、あなたが救世主なのかもしれませんね。一人の人間が複数のソウル・ウェポンを持つなど聞いた事がありませんもの」

その言葉を聞いて、清人はクレアとの会話を思い出した。

「・・・・あの、王妃様。こんな事、聞くべきじゃないかもしれないんですが・・・・」

「何でしょう？」

「ルナトリアさんが救世主にこだわる理由って何なんですか？　クレアさんに聞いたら、王妃様なら答えてくれるって言ってたんで」

王妃は少し考える仕草を見せた後、頷いて答えた。

「そうですね・・・。あなたには話しておくべきなのかもしれませんね。ルナトリアにとって、救世主というのは憧れでもあり、自身の目標でもあるの」

「憧れ・・・？」

「少し・・・昔話をしようかしら」

シルヴィアは椅子に座り、再び話し始めた。

「小さい頃から、あの娘はお伽噺が好きだったの。中でも、囚われのお姫様を、勇者が救いだす冒険の話が好きだったわ」

「な、なんか、今のルナトリアさんとずいぶんイメージが違いますね」

「そんな娘だったから、初めて言い伝えを聞いた時の反応は凄かったの。「もし救世主様が現れたら、私も一緒に戦う！　そして、救世主様のお嫁さんになりたい！」なんて言ってね。マードック将軍に頼んで、毎日のように剣の稽古をしていたのを覚えてるわ。そのおかげで、将軍を超すほどの剣技を身につけるまでに至って、今ではこの国最強だとまで言われているわ」

「あ、それはわかる気がします」

オークに向かって大剣を振るっていたルナトリアの姿を思い出し、清人は納得したように頷いた。

「けど、あの娘が本格的に救世主を求めるようになったのは、ルナトリアが十五歳の時に起こったある事件が切っ掛けなの」

「事件？」

「モンスター達によって、ある村が滅ぼされたの。その村は、当時

あの娘の世話役で、とても仲の良かったアンジェリカというメイドの故郷だったの。しかも、そのアンジェリカが暇を取って帰省していた時と重なって・・・」

「まさか・・・」

「ルナトリアは、マードック将軍と共に、自身で兵を率いてすぐさま村に向かったわ。けれど・・・あの娘が村に着いた時、全ては手遅れだった。僅かな希望を願って、アンジェリカの家に向かったけど、そこには、変わり果てた彼女の姿があったそうよ」

「ッ・・・・！」

「後で将軍に聞いた話だけれど、ルナトリアは、アンジェリカの亡骸を抱えながらこう泣き叫んだそうよ。「我はなんて無力なんだ！　力が・・・力が欲しい！　あの言い伝えの救世主のように・・・我自身が光となれるように！　我は・・・力が欲しい！！」と」

「それが、ルナトリアさんが救世主を求める理由・・・なんですね」

「もちろん、それだけが全てじゃないでしょうけどね。でも、だからこそ、キヨト様に出会えて嬉しかったのよ。あなたを連れて城に戻った時のあの娘の表情、あなたにも見せたかったわ。「父上！　母上！　やりました！　とうとう、救世主が我の元へ来てくれたのです！　これで、民達に光を与える事が出来ます！！　もう二度と、アンジェリカのような犠牲者を出す事もないでしょう！！」なんて言ってたわ。子どもの頃のような満面の笑みを浮かべてね」

「・・・・・」

大切な人を守れなかった絶望感と無力感・・・それが、ルナトリアに救世主を求めさせる理由だったのだ。自身が考えていたよりずっと深くて悲しい理由に、清人は何も言えなかった。

「・・・あら、もうこんな時間。お話に夢中になり過ぎていたみたいね」

気付けば、部屋の窓から夕日が差し込んでいた。王妃は椅子から立ち上がり、部屋の扉に近づいた。

「もう少ししたら夕食が来ると思いますから、それまでしばらくお待ちになってね」

「は、はい」

「それと・・・ルナトリアの事、よく見てあげてくださらない？あの娘、本当は寂しがり屋だから・・・」

そう言って、王妃は部屋を立ち去った。残された清人は、食事の時間まで、ずっと王妃との話を頭の中で繰り返していた。

それからさらに五日が経った。この日、たまたま遅く起きた清人は、城内が慌ただしくなっているのに気付き、部屋を出た。

「あの、何かあったんですか？」

たまたま近くにいたメイドに話を聞いてみる。すると、返って来たのは驚くべき内容だった。

「ルナトリア様がご出陣なさるんです。なんでも、モンスターが、嘆きの橋を渡って、この国に向かって来ているらしいんです」

「ルナトリアさんが！？」

「はい」

清人は慌ててルナトリアの元へ走り出した。

「ルナトリアさん！！」

「キヨト・・・」

顔を伏せるルナトリア。そんな彼女に、マードック将軍が話しかける。

「今回は楽勝ですな、ルナトリア様。何せ・・・我等には救世主様

がついておられるのですから」

「いや・・・キヨトは救世主ではない。救世主ではないのだ・・・・」

「え・・・？」

「キヨト・・・これまでの振る舞い、どうか許して欲しい。詫びになるとは思えないが、そなたは我が必ず守ってやる。我が愛する祖国に、モンスターなど近付けさせはせん」

「る、ルナトリアさん・・・」

「・・・出陣の時間だ。ではな・・・」

寂しげに微笑んだルナトリアが先頭となり、ガリオ軍が城を出て行く。その数・・・約五百。敵はかなりの数のようだ。

それを見送った清人は、自室に籠った。

「（大丈夫・・・ルナトリアさんの強さは俺もよく知ってる。彼女が負けるなどありえない）」

しかし、最後に見たあの表情は、とても今から戦いに行く者が浮かべるものではなかった。さらに、彼女はとあるフラグを立ててしまっている。そう・・・戦いの前に妙にしゃべるキャラは死んでしま

うという・・・あの死亡フラグを。

「（俺も戦うべきなんだろうか・・・。けど、俺なんかが行っても役に立てるはずないし）」

その時、清人はふと、ルナトリアとの出会いを思い出した。

≪我はルナトリア・ヴィ・ガリオ！　“ジェノサイド・クイーン”のソウルネームを持つガリオ王家の第一皇女である！　救世主よ！　我と共に、この暗闇に満ちた世界を照らす一筋の光となるのだ！！≫

「（いきなり何事かと思ったよな。けど、あの時のルナトリアさん、本当に嬉しかったんだろうな）」

≪何という威力・・・それが救世主のソウル・ウェポンなのか？≫

「（そういえば、あのマシンガン、明らかに実弾が出てたよな。ソウル・ウェポンになったから弾も変わったのか？）」

≪そういえば、そなたの名前を聞くのを忘れていたな。そうか、キヨトというのか≫

≪謙遜するな。あの時、確かに我はそなたに救われたのだぞ≫

≪わからん。数年前より、突如モンスターが凶暴化・大量発生し、我が国だけではなく、他国にも被害が及んでいるのだ。このモンスターの変化こそが、ノスタルジアを包む闇だと我は思っている。しかし、我はそなたと出会えた。救世主であるそなたと力を合わせれば、必ずやモンスター共を滅する事が出来るだろう！≫

≪そんな・・・そんなはずは・・・・！≫

思い浮かべたルナトリアの表情が、笑顔から悲しみに変わった。

≪いや・・・キヨトは救世主ではない。救世主ではないのだ・・・・≫

「（そうだ・・・俺は救世主なんて立派なものじゃない。けど・・・けど）」

清人の胸に小さな火が灯る。それが何の火なのか、清人はわからなかったが、大事なものだという事は理解していた。

≪いいかい清人？　この世には困っている人達がたくさんいる。け

ど、その全員を助ける事は誰にも出来ない。でもね、目の前の困っている人を助けるのは、誰にでも出来る事なんだよ≫

≪お前が大きくなった時、きっと助けを求める人が現れるはずだ。その時は、迷わず助けてあげなさい。そんな当たり前の事が出来る人間になってくれたら、おじいちゃんもおばあちゃんも嬉しいよ≫

そして、かつて祖父母に言われた言葉を思い出したその時、火は炎となり、清人の胸中を激しく燃やした。

「・・・・そうだな、じいちゃん、ばあちゃん。困っている人が目の前にいる。なら、助けるのに迷う必要なんてないよな！」

立ち上がり、リュックを背負った清人は、部屋を飛び出した。その目には・・・・一点の曇りも存在していなかった。

「あ！　キヨトお兄ちゃん！　今からエミリィと遊んで・・・」

「ゴメンエミリエッタちゃん！　俺、ちょっとルナトリアさんの所へ行って来る！！」

「え？　ちょ、どこ行くのお兄ちゃん！？」

背後にエミリエッタの声を聞きながら、清人は廊下を全速力で走っ

た。

「すみません！　嘆きの橋ってどう行ったらいいですか！？」

城門の前に出た清人は、門番に息荒く尋ねた。

「な、嘆きの橋でしたら・・・このまま城下町まで下りて、街の正門からひたすら真っ直ぐ進んで頂けたら見えて来ますが・・・」

「ありがとうございます！」

清人は言われた通り城下町に下り、多少迷いながらも正門を出た。彼の目の前に、広大な大地が広がっている。

「とにかく真っ直ぐ行けばいいんだよな。待っててくれ、ルナトリアさん！！」

気合いを入れ直し、清人は嘆きの橋に向かって駆け出した・・・

第四話　たとえ本物じゃなくても

ガリオ王都と、領地である『シュレク』の街との丁度中間地点、そこに嘆きの橋はかけられている。全長は約八百メートル。横幅も、荷馬車三台が横一列で進む事が出来るほど広い。そんな嘆きの橋の上で、ガリオ軍とモンスター達の戦いが始まろうとしていた。

「しかし、何故このような、人の手が入った場所にモンスターが・・・」

「おおかた、『ギッヘルの森』からやって来たのだろう。まったく、何もこのような場所に橋など作らなくてもよかっただろうに」

『ギッヘルの森』とは、嘆きの橋から三キロほど南に位置する深い森の事である。様々なモンスターが生息している危険な場所であり、嘆きの橋の由来は、この森から度々モンスターの叫び声が聞こえて来て、それがまるで嘆いているように聞こえる事から名づけられた。

「しかしルナトリア様。今まで『ギッヘルの森』からモンスターが出て来た事例はありません。しかも・・・・あれほどの数など」

マードック将軍は、『シュレク』の街の方から、王都側であるこちらに向かって、橋の上を進んで来る大勢のモンスターの姿を見てそう言った。

「考えるのは後だ将軍。今は、あのモンスター共を殲滅する事だけを考えればよい」

「はは、そうですな」

ルナトリアは後ろを振り向いた。自身に従ってついてきた兵が五百人。それと、街のギルドに要請して得た百の傭兵。合わせて六百人の視線が彼女に向けられる。

「聞け！　皆の者！　そなたらの目に見える通り、おぞましい魔物の群れが、嘆きの橋を渡ろうとしている！　このままヤツらが渡ってしまえば、間違いなく王都が危険に晒されるであろう！　我等が愛する国を、愛する者達を、魔物ごときに奪わせていいのか？　答えは否である！　さあ勇者達よ！　その手に持った剣を振るい、そなたら自身で大切なものを守るのだ！！」

「「「「「「「「「「おおおおおおおおおおおおおおおおおお！！」」」」」」」」」」

高らかに叫び、『ヴォルケイノ・ブレイズ』を天高く掲げるルナトリア。それに続き、兵達も雄叫びをあげながら剣を掲げる。兵達の持つ剣は、全て鋼で出来ている。中には例外もいるが、彼等はまだソウル・ウェポンを扱えるほどの実力を備えていないのだ。

「全軍突撃！　我に続けぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！」

ルナトリアが走り出す。いよいよ、戦いの火蓋が切って落とされたのだった。

ルナトリア達が戦いを始めたその頃、彼女達を追って王都を飛び出した清人はというと、道の途中でバテていた。

「はあっ・・・はあっ・・・くそ！　重いんだよこのリュック！！」

だったら背負って来るなという話だが、中には武器が入っているので、置いて行くわけにはいかなかった。

「せめて、この重さだけでも何とか出来れば・・・」

その時、清人の頭に、再び別の誰かの声が響いた。

≪呼んで・・・名前を・・・ソウル・ネームを・・・・・≫

「（これは、もしかして・・・）」

≪そうです。それによって、ソウル・ウェポンはいかようにも形を変えるのです。剣になったり、斧になったり、中には本になったソウル・ウェポンもあるそうです≫

王妃の言葉を思い出した清人は、まず頭の中でイメージしてみた。重さを感じない、いつでも物が取り出せる、ついでに、小さい入れ物にすればもっと楽だ。

≪呼んで・・・ソウル・ネームを・・・全ては、あなたの御心のままに・・・・≫

「・・・・決めた。あらゆる物を飲み込み、あらゆる物を吐き出す。・・・・『ブラック・アンド・ホワイト・ホール』・・・。今からお前は『ブラック・アンド・ホワイト・ホール』だ!!」

≪ソウル・ネームを確認。これより“ブラック・アンド・ホワイト・ホール”はマスターのソウル・ウェポンとなります。全ての災厄を飲み込み、あらゆる希望を吐き出してみせましょう≫

その言葉と共に、清人の背後が光り出す。いや、正確には、彼の背負っていたリュックが光り出したのだ。そのあまりの眩しさに、清人は思わず目を瞑った。すると、彼の肩がフッと軽くなった。

目を開けると、リュックは消えていた。その代わり、彼の腰に少し

大きめのウエストポーチが巻かれていた。ソウル・ネームを与えた事により、清人の思うままに形を変えたのだ。

「うおお！　ホントに変わったぞ！　重さも全然感じないし、かなり楽になったな！」

清人は試しにウエストポーチを開けてみた。すると、中は真っ暗だった。

「おいおい、ちゃんと中に入ってんだろうな」

不安に思いつつ、清人は手を入れてみた。

「うわっ、何か変な感触・・・。しかも、ちょっとヒンヤリしてるぞ。つーか、これってどうやって取り出したらいいんだ？」

とりあえず、マシンガンをイメージしてみると、手にゴツゴツした何かが触れた。それを取り出してみると、イメージ通り、マシンガンが握られていた。

「・・・っと、いつまでも驚いてるわけにもいかない。早く嘆きの橋に行かないと！」

汗だくになりながら、マシンガン片手に走る清人。・・・・その姿は、まるでどこかの帰還兵のようだった。

「フレイム・ブリンガー！！」

「ゴアァァァァァァァァァァ！？！？！？」

ルナトリアの気迫の籠った一閃を受け、一角を持った黒いモンスターが中心から真っ二つになった。死して尚、『ヴォルケイノ・ブレイズ』の炎がその骸を燃やし続けている。

「怯むなぁ！　何も考えず、目の前の敵を切り捨てろぉ！」

「さすがルナトリア様！　あのデビルホーンを一撃で仕留められるとは！」

「我等もルナトリア様に続けーーーーっ！」

ルナトリアの獅子奮迅な戦いぶりに、周りの兵達の士気もまた上がっていった。

「手前も負けておられませんな。このマードック・フライト。そし

て、我がソウル・ウェポン、『ジャイアント・ウルフ・ファング』の力、見せてやりますぞ！！」

長い棒の先につけられた紡錘形の柄頭に、鋭いとげが無数についている。自身の身の丈をゆうに超えているそのソウル・ウェポンを振り回しながら、マードックはモンスターの群れに突っ込んだ。

「食らえぃ！　ジャイアント・タイフーーーン！！！」

「ピギャアァァァァァァァァ！？！？！？」

マードックのソウル・ウェポンが直撃した複数のモンスターの肉片が辺りに飛び散る。生々しい音と、モンスターの悲鳴が橋に木霊した。

「ふはははは！　まだまだ回るぞーーーーーっ！！！」

「グギャアァァァァァァァァ！？！？！？」

「ふはははは！」

「・・・・そろそろか」

マードックの全包囲攻撃を見ていたルナトリアは、小さくそう呟いた。

「ふはは・・・うぷっ、気持ち悪くなって来ましたぞ・・・」

回転が徐々に治まっていく。マードックの顔はもの凄く青くなっていた。

「ま、まずい！　マードック将軍が酔われたぞ！　すぐに助け出せ！！」

「ええい！　だから、その戦い方は止めろと以前から言っていただろう！」

「も、申し訳ありませんルナトリア様」

「もうよい。将軍は下がっていろ。後は我等だけで充分だ」

「御意・・・」

「さあ、将軍」

兵に支えられ、マードックは後方へ下がって行った。

「マードックのおかげで、敵はだいぶ数を減らした！　このまま押し切るぞ！！」

「「「「「おおおおおおおおおおおおおお！！」」」」」

だがその時、突如橋全体が大きく揺れた。

「な、何だ！？」

「ッ！　ルナトリア様！　あれを御覧ください！！」

兵はモンスター達の後方を指していた。そこには・・・今までとはケタ違いの大きさのモンスターがいた。真っ青な肌に、丸太のような腕と足、頭には鋭い二本の角が生えており、その濁った瞳で、ガリオ軍を見つめている。

「ヘルギガンテスだと！？　なぜ『レベル三』のモンスターがここにいる！？」

ルナトリアの顔が驚愕に染まる。この世界のモンスターには、危険度に応じてレベルが設定されている。例えば、オークは『レベル一』。これは、最も弱いモンスターに区分されている。そして、今ガリオ軍に向かって来ているヘルギガンテスは『レベル三』。これは、ソウル・ウェポンを持った人間が四人がかりでようやく倒せるほどの強さを持ったモンスターを示す。そもそも、『レベル三』以上のモンスターは滅多に姿を現さない。ルナトリアが以前『レベル三』のモンスターに出会ったのは、今から五年も前の事だった。

「下がっていろ！　そなたらでは相手にもならない！！」

「し、しかし！　ルナトリア様お一人にお任せするわけには・・・！」

「無駄死にする気か！　いいから我の言う通り下がっていろ！！」

戦おうとする兵達を一喝し、ルナトリアはただ一人、ヘルギガンテスに立ち向かおうとしていた。

「我はルナトリア・ヴィ・ガリオ。『ジェノサイド・クイーン』のソウル・ネームを持つ、ガリオ王国の第一皇女。民達に光をもたらすまで・・・そして、まだ見ぬ救世主と出会うまで・・・我は死なない。死ぬわけにはいかない！！」

ルナトリアの脳裏に、一瞬だけ清人の姿がよぎった。それを振り切るように、ルナトリアは頭を振った後、ヘルギガンテスの懐に潜り込もうと体勢を低くした・・・・正にその時であった。

「ルナトリアさん！！」

「き、キヨト！？」

兵達を掻き分け、マシンガンを持った清人が、ルナトリアの元へ遂

に姿を現した。

清人が嘆きの橋にたどり着いた時、橋の前には、負傷した兵達が下がっていた。その中に、マードック将軍を見つけた清人は、ルナトリアの居場所を聞き出し、そして、走り続けて疲れた体に鞭打って、ようやく彼女の所へ到着したのだ。

「な、何故ここに来たのだキヨト！？　そなたは、救世主では・・・」

「確かに、俺は救世主である事を否定しました。けど・・・」

「グオォォォォォォォォォォォ！！！」

「くっ！　下がれキヨト！　このモンスターは危険過ぎ・・・！」

「やっかましい！！　俺は今ルナトリアさんと話してんだ！！　ちょっと黙ってろ！！」

「ンゴッ！？」

ひたすら走り続ける事によって、清人の精神は妙にハイになっていた。さらに疲労と、ヘルギガンテスの不愉快極まりない叫び声に、清人の精神はいよいよ限界を超え、結果・・・キレた。

「見るからに不健康そうな肌色しやがって！！　ちゃんと栄養バランス考えて食ってんのかテメエ！！」

「お、おい・・・キヨト？」

「大体だな！　テメエみたいなボスっぽいキャラは、深い洞窟の奥や、天高くそびえる塔の最上階とかでどっしり構えてるもんだろうが！！　それを、こんな天気のいい日に、見晴らし抜群な橋を渡るだと！？　散歩気分かコラァ！！」

「ゴ・・・ゴォ・・・・？」

罵詈雑言・・・というか、説教を受け、人語を理解出来ないはずのヘルギガンテスが首を傾げた。

「す、すげえ・・・あのヘルギガンテスに説教してるぞ」

「あ、ああ。さすが救世主様だな」

「とにかく！　俺はルナトリアさんに大切な話があるんだ！　わかったら黙ってろ！　つーか死ねぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！」

ドガガガガガガ！！！

「ブルグァァァァァァァァァ！？！？！？」

マシンガンが火を噴いた。大量の弾丸が、次々にヘルギガンテスの体に突き刺さっていく。緑色の血液が穴から吹き出る。

「な、なんと・・・あの強固なヘルギガンテスの体に容易く穴を開けるとは・・・・」

「オラ！　オラ！！　オラァァァァァァァ！！！」

ドガガガガガガガ！！！　ガチッ・・・・！！

「ッ！？　くそ、弾切れか！！」

「グオォォォォォォォォォォ！！！」

銃弾の嵐が止み、うずくまっていたヘルギガンテスが再び動き始めた。清人に向かって、その剛腕を勢いよく振り下ろす。

「うおぉぉぉぉぉぉぉぉ！？！？！？」

スレスレで何とか回避した清人。元の世界で、部活に所属してはいなかったが、彼の反射神経と身体能力は、中々のものだった。

「グオォォォォォォォォォォォ！！！」

「くそっ！　何で俺ばっかり・・・！」

「「「「「（いや、当然だろう）」」」」」

戦いを見ている者達は、全員心の中で同じツッコミをしていた。

「と、とにかく！　俺も武器を・・・！」

≪力が必要なら・・・呼んで、ソウル・ネームを・・・・≫

「（またか！）」

「グオォォォォォォォォォォォ！！！」

ヘルギガンテスの手から逃げ続けながら、清人はウエストポーチに手を突っ込んだ。そして、槍をイメージして、引き抜きながらソウル・ネームを叫んだ。

「翼持つ守護者の槍！　来い・・・『ウイング・オブ・ガーディアン』！！」

≪ソウル・ネームを確認。これより“ウイング・オブ・ガーディアン”はマスターのソウル・ウェポンとなります。この翼でマスターを守り、迫り来る脅威はこの刃で貫いてみせましょう≫

清人が槍を振り上げたのと、ヘルギガンテスが腕を振り下ろしたのは同時だった。両者のぶつかり合った衝撃が、ルナトリア達を襲う。

「ぐぐぐぐぐ・・・・・！」

清人は、何とかヘルギガンテスの一撃を受け止めていた。だが、徐々に彼の体が沈んでいく。

「キヨト！」

「ルナトリアさん・・・。確かに、俺は救世主じゃありません。でも、目の前で困っている人がいて、自分に助けられる力があるのに何もしないヤツは、ただの最低野郎だって事もわかってます」

苦しげな表情を浮かべながら、清人は自身の思いを告白し始めた。

「な、何を・・・？」

「俺、ルナトリアさんが救世主を求める理由、王妃様に聞きました。それを聞いた上で、俺はルナトリアさんの力になりたい！　救世主

とかそういうのは関係無く、竜胆　清人として！　俺は、キミの力になりたいんだ！！！」

「キヨト・・・そなた・・・・・」

その時、『ウイング・オブ・ガーディアン』が激しく光り始めた。まるで、清人の思いに応えるかのように・・・。

「うおぉぉぉぉぉぉぉぉ！！」

沈んでいた清人の体が持ち上がる。少しずつ、ヘルギガンテスを押し返しているのだ。そして、とうとう完全に清人が押し勝ち、ヘルギガンテスの巨体が大きく後退した。

「ルナトリアさん！　一緒に戦いましょう！」

「（やはり、我は間違っていなかった・・・。キヨト、そなたこそが・・・）」

「グオォォォォォォォォォォ！！！」

ルナトリアの目に再び光が戻った。オークに囲まれた時の様に、不敵に微笑んだ彼女は、『ヴォルケイノ・ブレイズ』を力強く構えた。

「キヨト！　止めはそなたに任せるぞ！　フレイム・ブリンガー！！」

ルナトリアの一撃がヘルギガンテスの腹を横一文字に切り裂いた。すでに大量の血を失っているヘルギガンテスは、その鈍重な動きをさらに鈍くしていた。

「ええ！？　と、止めって言ったって・・・俺にはルナトリアさんのような必殺技っぽいの無いですよ！」

「難しく考えるな！　ソウル・ウェポンは、所持者の思いによって無限の力を発揮する！そなたの内に・・・そなたの魂に浮かんだ言葉を、そのまま叫べばよいのだ！！」

「俺の・・・魂」

清人は再び考えた。槍の特性・・・それは、一点からの突破力。ヘルギガンテスを見る・・・あれだけの血を流しながら、まだ動いている。だが、いくらしぶとくても、急所を突かれれば必ず倒れるはずである。ならば・・・

「急所なんてわからない。けど、ソウル・ウェポンは、持ち主が望めば、どんな事だって可能にしてくれる。俺にはわかる・・・この一撃で、あいつを倒せる！！」

清人は、『ウイング・オブ・ガーディアン』を大きく振りかぶった。そして、自身に残っていた全ての力を込め、ヘルギガンテスに向かって投擲した。

「全てを突き抜け！　ヴァイタル・ペネトレイション！！！」

ソウル・ネームを得た事によって、左右それぞれ合わせて四枚になったウイングと、穂先、その五つ全てが、ヘルギガンテスの急所・・・心臓部分に深々と突き刺さった。

「グギャアァァァァァァ・・・・・！！」

最後の抵抗であるかのように、両腕を滅茶苦茶に振り回した後、ヘルギガンテスは仰向けに倒れ、そのまま二度と動く事は無かった。

「か・・・勝った・・・・？」

確認の為に槍で突いてみるが、ヘルギガンテスはピクリとも動かなかった。次の瞬間、兵達の歓喜の叫びが橋の上に響き渡った。

「やった！　やったぞ！　ヘルギガンテスを倒した！！」

「見ろ！　残りの魔物達も逃げて行くぞ！！」

「ルナトリア様万歳！　救世主様万歳！！」

「は・・・ははは・・・・やった・・・・」

清人はその場にへたり込んだ。緊張が切れた事で、疲れが一気に襲いかかったのだ。訓練を全くしていない素人が、いきなりこんな戦いに臨んだのだから、無理もないのだが。

「キヨト、見事だったぞ」

「あはは、最後はしまらなかったですけどね。もう疲れて一歩も動けないですよ」

「これで、そなたに救われたのは二回目だ。もう疑いはしない、キヨト・・・そなたが救世主なのだ」

「え・・・？」

「そなたが本物の救世主であるかは関係ない。少なくとも・・・我にとっての救世主は、そなただ」

「ルナトリアさん・・・」

「だから・・・ありがとうキヨト。我を助けてくれて」

満面の笑みを浮かべ、ルナトリアは感謝の言葉を述べた。その顔は、

ただ純粋に感謝の気持ちの込められた、とても美しい笑顔だった。
同時に、清人が初めて見た、彼女の“素”の表情だった。

≪もちろん、それだけが全てじゃないでしょうけどね。でも、だからこそ、キヨト様に出会えて嬉しかったのよ。あなたを連れて城に戻った時のあの娘の表情、あなたにも見せたかったわ。「父上！母上！　やりました！　とうとう、救世主が我の元へ来てくれたのです！　これで、民達に光を与える事が出来ます！！　もう二度と、アンジェリカのような犠牲者を出す事もないでしょう！！」なんて言ってたわ。子どもの頃のような満面の笑みを浮かべてね≫

「・・・・なるほど。確かに王妃様の言う通りだな」

「何か言ったか？」

「いえ、何でもありませんよ」

「そうか。ではキヨト、共に帰ろう。王都に」

「はい」

こうして、モンスターを撃退したガリオ軍と清人は、互いの健闘を称え合いながら、王都への道を進んで行くのだった。

第四話　たとえ本物じゃなくても（後書き）

ウエストポーチのソウル・ネームがイマイチ。けど、これしか思いつきませんでした。

第五話　強くなる為に

王都へ帰還した清人は、そのままルナトリアに連れられ、戦果の報告の為に玉座の間に向かった。そこには、王と王妃、そして、姉の無事な姿を一目見ようと、クレアとエミリエッタが待っていた。

「父上、母上、嘆きの橋に現れたモンスター軍、全て撃退致しました」

「そうか。ご苦労であったなルナトリアよ」

「無事で何よりです」

「ありがとうございます。ですが、手放しで喜べない話がありまして・・・・」

「何かあったのか？」

「侵攻して来たモンスターの中に・・・・ヘルギガンテスの姿がありました」

ヘルギガンテスの名に、玉座の間にいる全ての人間の顔が驚きに染まった。それだけ、『レベル三』のモンスターは脅威な存在なのだ。

「ヘルギガンテスだと？　何故そのような大物が・・・・」

「これも、モンスターの凶暴化・・・つまり、闇の影響で間違いないかと我は思っています」

「ですが、『レベル三』のモンスターをたった一人で倒されるとは、流石ルナトリア様ですな」

控えていた臣下の一人がそう声をあげた。だが、ルナトリアは静かに首を横に振りながら答えた。

「いや、我一人で戦っていれば、おそらく、我は今この場にいなかったであろう。ヘルギガンテスを倒せたのは、ここにいる救世主・・・キヨトのおかげである」

ルナトリアの隣でジッと黙っていた清人は、いきなり自分の名前を呼ばれて慌てた。

「し、しかし、リンドー殿は救世主ではないとご自身でおっしゃっていたではありませんか。ですから、ルナトリア様も戦いに参加させなかったのでしょう？」

「そうだ。だが、キヨトは来てくれた。勝手に期待した挙句、避けるような振る舞いをしていた我の力になりたいと言ってくれた。もう、我は二度と疑わない。キヨトこそ、我が求めていた救世主なのだ」

「で、ですからルナトリアさん。俺は救世主じゃ・・・」

「ルナでよい。それと敬語もいらん。そなたには、いつまでも他人行儀でいて欲しくないのでな」

「わ、わかりま・・・」

「・・・・（ジ～～～）」

「・・・・わかった。ルナ」

「うむ、それでよい」

「うわわ、聞いたクレアお姉様？　ルナお姉様があんな事を・・・」

「ええ。殿方にお許しになったのは初めてじゃないかしら」

「え？」

「う、うるさい。余計な事を言うな二人とも」

茶化すような二人の言葉に、ルナトリアの顔に僅かに赤みが差した。

「キヨトよ、ルナトリアを救ってくれたのはこれで二度目だ。このカイオス、お主に深く感謝の意を示させてもらう」

「は、はい！　身に余る光栄です！」

「ところで、これは私の興味本位なのだが・・・いったい、お主は

どうやってヘルギガンテスを倒したのだ？　お主のソウル・ウェポンはそれほどまでに強力な物なのか？」

「えっと、それはですね・・・」

「待てキヨト。口で言うより、実際にお見せした方がよいぞ」

「え、こんな所で武器出していいんです・・・いいのか？」

「構わん。そなたが変なマネをするはずがないからな」

「そういう事なら・・・」

清人はウエストポーチに手を入れ、そこから、あの戦いで得た新たなソウル・ウェポン、『ウイング・オブ・ガーディアン』を取り出した。

「御覧下さい父上、母上。これが、ヘルギガンテスの心臓を一撃で貫いた、キヨトのソウル・ウェポンです。名前は・・・」

「『ウイング・オブ・ガーディアン』って言います」

「ほお・・・あの強靭な肉体を持つヘルギガンテスの心臓を一撃とは・・・」

「あなたのソウル・ウェポンと同じくらいの威力を秘めているようですね」

「・・・・感じる」

「どうしたのクレアお姉様？」

「感じるの。とても力強くて、とても優しい心・・・。これが、キヨトさんの心なんですね」

「ふうん・・・。あれ？　そういえばキヨトお兄ちゃん。廊下でエミリィと会った時に背負ってたヤツどうしたの？」

「ああ。実は、あのリュックにもソウル・ネームを与えて、今は・・・こんな感じ」

清人は、腰についているウエストポーチを指した。

「王妃様の言ってた通り、本当に俺の望む形に変わりました。凄いですね、ソウル・ウェポンって」

「それは違うぞキヨト。重要なのはソウル・ネーム、そして、そなたの思いだ」

「？　どういう事？」

「そなたの思いが強ければ強いほど、ソウル・ウェポンはより強力な物へと変わるのだ。そして、その思いの強さを体現したのが、ソウル・スキル・・・我の『フレイム・ブリンガー』や、あの時そなたが放った『ヴァイタル・ペネトレイション』といった技なのだ」

この世界で何より大切なのは、思い・・・つまり、イメージを強く持つ事である。例え不可能だと思われるような事も、可能だという思いさえ持てば、それは不可能ではなくなる。・・・簡単に言えば、妄想力が高い者ほど強くなるのだ。

「（つまり、イメージさえすれば、あの即死魔法だって使えるって事か？）」

「キヨト様？　私の顔に何かついてますか？」

「あの、王妃様。・・・相手を一撃で倒せる氷魔法って使えますか？」

「ええ、ありますよ。ただ、魔力の消費が激しくて、使うと一週間も寝たきりになってしまうのですが。名前は、エタ・・・」

「い、いいです！　わかりました！」

「？」

「（俺じゃなく、総太がこの世界に来てれば、間違いなく最強になってたな）」

「さて、キヨト。此度のお主の働きに値する褒美をとらせる。望む物を言うがよい」

「い、いいですよ褒美なんて。俺は、そんな物が欲しくてルナを助けたわけじゃ・・・」

「ふっ、わかっておる。だが、充分な働きをした者に褒美をとらせる・・・これは、王としての義務なのだ。お主が受け取ってくれねば、私は恩知らずになってしまう」

「と、言われましても、欲しい物なんて別に・・・」

頭を捻らせる清人。だが、やがて思いついたように口を開いた。

「でしたら、俺を兵として働かせてくれませんか？」

「働く？」

「はい。ルナの力になるには、まだ、俺には力が足りません。戦い方を学ぶ為にも、兵として基礎訓練や任務をこなせば、今よりきっと強くなれるはずですから」

「なるほど。だが、お主はすでにソウル・ウェポンを持っている。兵の基礎訓練ではちと物足りぬかもしれんぞ」

「そうですか・・・。う～ん、ならどうしたら・・・・」

「じゃあさ、キヨトお兄ちゃん。ギルドなんてどう？」

「ギルド？　冒険者や傭兵が集まって、依頼をこなしたりするアレ？」

「そうだよ。よく知ってるね」

「そんな物まであるのか」

「嘆きの橋での戦いにも、ギルドの傭兵が百人ほど参加していたぞ」

「言われてみれば・・・兵達とは違った鎧や服装の人が何人かいたような・・・」

「ですが、依頼の中には、モンスターを討伐するような危険な物もあります」

クレアが心配そうに口を開く。

「いえ、クレアさん。むしろ望む所ですよ。やっぱり、実戦経験が一番だと思いますから」

「ならばキヨト、私が案内状を書いておこう。それがあれば、すぐにでも依頼を受ける事が出来るはずだ」

「ありがとうございます」

「むう、キヨト。ギルドなぞ行かなくとも、そなたが望むなら我がいくらでも鍛えてやるぞ？」

「はは、今の俺じゃ、瞬殺されて終わりだよ。もう少し強くなったら、改めてお願いするから」

「・・・・そうか」

ショボンとするルナトリア。何でそんなに落ち込んでるのかわからなかった清人は、首を傾げた。

グキュルルル！

その時、清人の腹の虫が勢いよく鳴った。

「ちょ、このタイミングで鳴るか普通！？」

「あはは、キヨトお兄ちゃん、凄い音だね」

「ふふ、よっぽどお腹が空いているんですね」

「す、すみません。朝飯も食べずに飛びだしたものですから」

「すぐに食事を運ぶように言いましょう。キヨト様、とりあえず今日はお休みになって、ギルドへは明日向かわれるといいわ」

「そ、そうですね。さすがに、今日はもう動く気になりません」

自室に戻った清人は、食事を済ませるとすぐに横になり。そのまま翌日まで爆睡した。そして翌日、王から紹介状を受け取った清人は、城下町にあるギルドへと向かった。

このギルドで、清人は新たな出会いを果たすのだが、それはもう少し先の話である・・・

第六話　ギルド（前書き）

ぜひとも、一度感想をお願いいたします。

第六話　ギルド

「ここがギルドか・・・」

目の前の建物を見上げ、清人はそう呟いた。入口の扉には、交差した剣が描かれている。中からは男達の騒がしい声が聞こえて来る。

「とりあえず、入ってみるか」

扉を開け、清人はギルド内に足を踏み入れた。その途端、中にいた冒険者や傭兵の視線が一斉に清人に注がれた。

「おい、あの小僧・・・」

「ああ、間違いねえ。昨日、ヘルギガンテスをぶっ倒したアイツだ」

「ランクはいくらだ？　Cか？　Bか？」

「何言ってんだ。ヘルギガンテスを倒すヤツだぞ？　Aランクはくだらねえだろ」

ヒソヒソと話し出す男達。少し居心地の悪さを感じながら、清人は近くにいた男に話しかけた。

「すみません」

「お、おう。何だ？」

「えっと、俺、ここに来るの初めてで。受付って何処ですか？」

「あ、ああ、なるほど。お前さん、別の街から来たんだな。受付ならそっちだ」

男の指す方には、大きなカウンターがあり、清人と同じ年くらいの少女が手を振っていた。

「ありがとうございます」

男に礼を言い、清人はカウンターに向かった。

「ガリオ王国のギルドへようこそ！　私は、受付嬢のジェシカ・コーラスです！」

「初めまして、キヨト・リンドーです」

「本日はどういったご用件でしょうか？　依頼の受注ですか？　それとも、依頼されますか？」

「あの、これを・・・」

清人は、王に渡された紹介状を見せた。それを見たジェシカは、目を見開いて慌てだした。

「お、王家の捺印！？」

「今日はギルドで活動出来るよう、登録・・・でいいんですかね？
それをしようと思いまして」

「わ、わかりました！　少々お待ち下さい！」

ジェシカは大急ぎで登録の準備を始めた。相手は王家の関係者。待たせたりして、もし、機嫌を損ねられでもしたら、この国にいられなくなるかもしれない。

「（俺と同い年くらいに見えるけど、しっかりしてるなぁ）」

そんなジェシカの対応を見て、清人は、とても仕事熱心な少女なのだと思っていた。というか、勘違いしていた。いや、実際仕事熱心なのだが・・・

「お、お待たせしました。こちらが、ギルドカード作成に必要な履歴書です。本来でしたら、内容を全て埋めて頂くのですが、王家からのご紹介という事なので、名前だけで結構です」

「ギルドカード？」

「詳しくご説明いたしましょうか？」

「お願いします」

ジェシカはコホンと咳を一つすると、改めて説明を始めた。

「では、ご説明いたしますね。ギルドカードというのは、あなたがギルドに所属しているという事を証明する大事な証明書です。このカードがなければ、依頼を受ける事が出来ません。紛失には充分気をつけてくださいね。それと、ギルドカードにはランクというものがあります。これは、あなたの強さを表す目安であり、そのランクに応じた依頼を受ける事が出来ます」

元の世界で遊んでいたゲームと同じ感じだったので、清人はすぐに理解出来た。

「初めのランクはGです。これは登録したての方だけの特別なランクで、試験用の依頼を一つこなせば、すぐに上のランクであるFランクに昇格出来ます。それからは、同じランクの依頼を一定以上こなす事によって昇格が可能となります。ただ、Dランクに昇格する為には、Eランクの依頼をこなすだけではなく、ソウル・ウェポンを持つ事も条件となります」

「なるほど」

「では、お名前をお願いします。他にわからない事がありましたら、その都度ご説明させて頂きますので、お気軽にお尋ねください」

「はい。ご丁寧にありがとうございます。ところで・・・早速お願いなんですが」

「何でしょう？」

「・・・俺の名前って、どう書けばいいんでしょう？」

当然の話だが、清人はこの世界の文字を知らなかった。なので、書きたくても書けなかったのだ。

「まあ・・・でしたら、私が代わりにお書きしましょうか？」

「すみません。お手数かけます」

ジェシカは、履歴書の一番上にサラサラっと文字を書いた。それを横に置き、今度は二枚の紙を取り出した。

「では、この二枚の中から、Ｆランク昇格の為の試験依頼をお選びください。あなたが依頼をこなしに出ている間に、ギルドカードを作成しておきますので」

「わかりました」

「まず一つ目は、『英雄の広場に生息するオーク五頭の討伐』。二つ目は、『眠りの花を三本採取』です」

「その『眠りの花』っていうのは？」

「沈静効果のある花です。王都から少し歩いた所にある『レタの池』の周辺に自生しています」

「う～ん・・・どっちにしようかな・・・」

「難易度的には、後者の方が楽ですよ。モンスターと遭遇する確率も低いですし。ほとんどの方はこちらを選んでます」

清人は少し悩んだが、そもそも、自分がギルドに来たのは強くなる為なので、採取より、討伐の方を選んだほうがいいと判断した。

「決めました。オークの討伐にします」

「では、討伐の証として、オークの尻尾を五本持ち帰ってください。それをこちらが確認した所で、依頼達成となります」

「わかりました。早速行って来ます」

「ご武運を」

ジェシカに見送られ、ギルドを後にした清人は、始まりの場所・・・
『英雄の広場』へ出発した。

「さて・・・オークを探さないと」

『英雄の広場』に到着した清人は、右手に『ウイング・オブ・ガーディアン』を持ちながら、ターゲットであるオークを探していた。

「・・・・いた！」

草むらに隠れ、様子を伺う清人。視線の先では、一匹のオークが、木に生っている実を取ろうと、手を伸ばしていた。

「な、何か緊張するな・・・」

すでに実戦を経験している清人だが、あの時はノリで戦っていたようなものであり、ちゃんと戦うのはこれが初めてである。

「大丈夫。男は度胸、何でもやってみせるのが大事だって、誰かが言ってたしな。
落ち着いてやればうまくいくさ」

深呼吸を二度繰り返し、清人は勢いよく草むらから飛び出した。

「プギャッ！？」

「おりゃあぁぁぁぁぁぁ！」

ザシュ！

「プギャアァァァァァァァァァァ！！」

振り返ったオークに『ウイング・オブ・ガーディアン』の一撃が綺麗に入る。叫び声をあげ、オークはその場に倒れ込んだ。『レベル一』の中でもとりわけ弱いとされているオークが、ソウル・ウェポンの攻撃に耐えられる筈もなかった。

「これで一匹目か。とりあえず・・・尻尾を切って・・・」

「「プギャアァァァァァァァァァァ！！」」

「ッ！？」

尻尾を切ろうとオークの骸に近づこうとしたその時、新たに二体のオークが姿を現した。仲間の断末魔を聞き、駆け付けて来たのだ。

「プギャアァァァァァァァァァァァ！！」

「うおっ！？」

オークの持つ棍棒が清人に襲い掛かる。だが、清人は『ウイング・オブ・ガーディアン』でそれを受け止めた。

「プギャアァァァァァァァァァァァ！！」

その隙を狙い、もう一匹のオークが、清人の脛に棍棒を叩きつけた。

「ふぐおあぁぁぁぁぁぁ！？！？！？」

脛をさすりながら、のたうち回る清人。それを見て、オーク達は嬉しそうに声をあげた。

「「プギャプギャプギャーー♪」」

「くそっ！　その鳴き声で指差されると、馬鹿にされてるみたいで妙に腹が立つ！！」

涙目で立ち上がった清人は、お返しとばかりに、『ウイング・オブ・

ガーディアン』を逆に持ち、柄の部分でオーク達の脛っぽい部分を殴打した。

「「プギャア！？！？！？」」

「だははは！　ざまあ見やがれ！」

同じ様にのたうち回る二体に、清人は『ウイング・オブ・ガーディアン』で止めを刺した。

「うう、まだジンジンする・・・。けど、これで残すは後二体・・・」

「「プギャアアアアアアアアアアアア！！」」

「って、またかよ！！」

またしても、二体のオークが同時に現れた。だが、一方のオークは、少し様子が違っていた。他のオークに比べ、体が一回り大きく、棍棒にもトゲがついている。

「ボスか？　また面倒臭そうなのが出て来たな」

「プギャ！」

「プギャプギャ！」

「プギャ～～！」

「ぷ、プギャ！？」

ボスオークに何か言われたのか、手下のオークが落ち込んだ様子で清人の前に立った。

「何か・・・お前も色々大変そうだな」

「プギャ！」

「けど、悪いな。俺はお前を倒さなくちゃいけない。覚悟してくれ！」

「プギャアアアアアアアアアア！！」

オークが棍棒を振り下ろす。だが、それよりも速く、清人の突きが、オークの腹に決まっていた。

「プ・・・プギャ・・・・」

棍棒が地面に落ち、続いて、オークの体も地面に沈んだ。

「プギャ！　プギャプギャ！！」

「後はお前だけだな」

いよいよ最後の一匹・・・ボスオークが動き出した。強敵である事は必至だが、しかし、清人には、まだ奥の手が残っていた。

「使ってみるか・・・あの技を」

清人は体の力を抜き、大きく息を吐いた。そして、自身がボスオークを貫くイメージを強く思い描き、気合いと共に、『ウイング・オブ・ガーディアン』を突き出した。

「貫け！！　ヴァイタル・ペネトレイション！！」

素人の放つ甘い突き。だが、それでも、閃光のように突き出された一撃は、ボスオークに何が起こったか理解させないまま、その心臓を捉えていた。

「プギャ・・・・？」

体に突き刺さった穂先を見て、ボスオークは戸惑ったような声を上

げながら・・・絶命した。

「これで五匹っと・・・。あー疲れた」

無事に討伐を終えた清人。だが、これで終わりではない。すぐに戻って依頼達成の報告をしなくてはならないのだ。

「よし、これでいいな」

尻尾を回収し、清人はギルドへ戻った。

「お帰りなさい。ずいぶん早かったですね」

「いや、何故か立て続けに襲われまして・・・」

「では、討伐の証である、オークの尻尾を五本お願いします」

「はい」

清人は、ウエストポーチに入れておいた尻尾をカウンターに置いた。

「・・・あら、これって、オーク・リーダーの尻尾じゃないですか」

ボスオークから取った尻尾を見て、ジェシカは驚いたようにそう言った。どうやら、正確な名前はオーク・リーダーというらしい。

「オーク・リーダー？」

「名前の通り、数匹のオークを纏めている、オークのリーダーです。まさか、初めての方が、オーク・リーダーを倒すなんて・・・リンドー様はお強いんですね」

「たまたまですよ。あと、キヨトでいいですよ」

「わかりました。では、キヨトさんとお呼びしますね。依頼達成、おめでとうございます。これで、あなたもギルドで活動出来るようになりました」

続けて、ジェシカは小さなカードを清人の前に置いた。

「これがギルドカードです。ほら、名前の横にFって書いてるでしょう？　これが、キヨトさんのランクです」

見ると、確かに名前の横に、大きくFと書かれていた。

「それではキヨトさん。これからたくさん依頼を受けて、ランクアップ出来るよう頑張ってくださいね。私も応援してますから！」

「はい。ありがとうございます」

こうして、清人は試験依頼をクリアし、無事にギルドへ加入する事に成功した。城に戻った清人から話を聞いたルナトリア達は、彼のギルド加入を大いに喜んでくれた。

そしてこの日から、清人の新しい毎日が始まるのだった・・・

第七話　新たな出会い

「おはようございます、キヨトさん」

清人がギルドに通うのも、これで四回目だった。この日までに、すでに四つのFランクの依頼をこなしている清人は、あと一つ依頼を達成すれば、Eランクへ昇格する事が出来る。

「Eランク昇格まであと一つですね。さあ、今日はどんな依頼を受けますか？」

「そうですね・・・」

清人が依頼書に目を通そうとしたその時、入口の扉が勢いよく開かれ、一人の少女が姿を現した。小柄な体つきで、オレンジ色の髪をツインテールに纏めており、左右の腰には、それぞれ小剣が差してある。

「こんにちはーーーッス！　ジェシカさん、今日はどんな依頼が来てるッスか？」

その少女は、清人の隣に並ぶと、ジェシカに親しげに話しかけた。

「おはようリンちゃん。今日も元気ね」

「にへへ、元気なのがアタシの取り柄ッスから！」

「ちょっと待っててね。先にキヨトさんの方を済ませないと」

「キヨト？」

「こんにちは」

「あ、こんにち・・・ッ！？　お、大きい！？　大き過ぎるッスよお兄さん！」

少女が清人を見上げ、驚いたように声をあげた。清人の身長は百八十三センチ。少女と並ぶと、巨人と小人のように見える。

「こちらはキヨト・リンドーさん。つい先日登録を済ませたばかりのFランクの方です」

「な、なるほど。道理で初めて見る顔だったわけッスね」

「キミは？」

「あ、名乗るのが遅れたッス！　アタシはリン・オルト！　先日Eランクになった、十四歳の女ッス！　好きな食べ物は『ジョモー牛のステーキ』で、嫌いな食べ物は『パラパラ草のサラダ』ッス！　趣味は体を動かす事で、ヒマさえあれば走ってるッス！　それから・・・」

聞いていないような事まで矢継ぎ早に話し始める少女。清人は苦笑いを浮かべながらやんわりと止めに入った。

「い、いや、もういいよ。俺はキヨト・リンドー。色々あってギルドに加入する事になったんだ」

「よろしくッス。あ、ちなみに、アタシのソウル・ネームは“ヴィクティム・パーソン”ッス。お兄さんはなんてソウル・ネームなんスか？」

「俺は・・・」

どう答えればいいのか悩む清人だったが。とりあえず、友人につけられたあの名前を言ってみた。

「お、俺のソウル・ネームは、“ワンハンド・トール”って言うんだ」

「ほえー、カッコいいソウル・ネームッスね」

「（総太、初めてこのあだ名に感謝するぞ）」

「そうだお兄さん、こうやって知り合えたのも何かの縁ッス。一緒に依頼を受けてみるのはどうッスか？」

「一緒に？」

「依頼っていうのは、何も一人でこなさなくてもいいんです。むしろ、上のランクの依頼は、仲間がいないと達成出来ないようなものがほとんどなんですよ」

ジェシカがわかりやすく説明する。言われてみれば、このギルドにいるほとんどが、所謂パーティーというものを組んでいた。清人のように、一人で依頼をこなす方が少ないのだ。

「アタシもFランクの時に、Eランクの人に手伝ってもらった事があるんです。だから、今度はアタシがお手伝いしたいんです」

「キミは優しい子なんだな」

清人がそう言うと、リンは照れたように両手をバタバタ動かしながら答えた。

「な、何言ってるんスか！　協力し合うのは当然の事じゃないッスか！」

「じゃあ、よろしくお願いします、オルトちゃん」

「リンでいいッスよ」

「それじゃあ、話も決まった所で、キヨトさん、改めて依頼をお選

びください」

清人は再び依頼書に目を通し始めた。そして、一枚の依頼書を手に取った。

「『『シュレク』の街へ小包を届ける。報酬は五百リラ』。・・・こんな依頼もあるのか」

「モンスターに出会う危険がありますから、こうやってギルドに依頼される方もいるんです」

「『シュレク』の街っていうのは、嘆きの橋を渡ってしばらくの所にある街ッス。知ってるッスか？」

「嘆きの橋か・・・。よし、ジェシカさん、これに決めます」

「わかりました。では、小包を持って来ますので、少し待っててくださいね」

ジェシカは奥に引っ込むと、少しして片手サイズの包みを持って来た。

「この小包を、『シュレク』の街のギルドに持って行けば依頼達成です」

「わかりました」

「この依頼を達成すれば、晴れてキヨトさんはEランクです。頑張って下さいね」

「大丈夫ッス！　アタシも精一杯サポートするッス！」

「それじゃ、行って来ます」

清人はリンと共に、『シュレク』の街に向けて出発した。幸い、嘆きの橋の手前までは、モンスターに出会う事もなく、安全に進む事が出来た。

「あと半分って所ッスね。もう一頑張りッス」

だが、そんな二人の前に、モンスターが姿を現した。緑色の軟体生物・・・スライムと、一メートルほどの亀・・・アイアン・タートルだった。

「敵か！」

清人はすぐに『ウイング・オブ・ガーディアン』を取り出そうとウエストポーチに手を伸ばした。だが、そんな清人を制し、リンが前に出た。

「リン？」

「ここはアタシに任せるッス！」

右手で左腰の、左手で右腰の剣を引き抜くリン。どうやら、彼女は二刀流の使い手らしい。両手に握られた双剣が、太陽の光を反射してキラリと光る。

「スライムもアイアン・タートルも、動きはそれほど素早くないッス。だから、スピードで撹乱してやれば！」

まず、リンはスライムに向かって突っ込んだ。スライムが形を変え、リンに襲いかかろうとしたが、彼女は跳躍してそれを回避し、スライムの背後に回り込んだ。

「遅いッス！」

双剣を同時に振り抜くリン。スライムは一瞬で両断され、地面に溶けていった。

「後は、アイアン・タートルだけッス！」

しかし、アイアン・タートルは、その名前の由来である、鋼鉄の甲

羅に体を引っ込めてしまっていた。

「ありゃりゃ、これじゃ攻撃出来ないッス。こうなったら・・・」

「こうなったら？」

「逃げるが勝ちッス！」

リンが清人の手を引き、アイアン・タートルの横を駆け抜けた。そのまま百メートルほど走り続け、リンは清人の手を離した。

「ふう、ここまで来れば安心ッスね」

「何で逃げたんだ？」

「モンスターだって生きてるんです。戦う気が無いんなら、無理して倒す事もないッスよ」

「そうか・・・。それにしても、リンって強いんだな。その双剣って、もしかしてソウル・ウェポンなのか？」

スライムを瞬殺したリンの戦いを見て、清人はそんな事を言った。

「いえいえ、これはただの鉄の剣ッス。アタシはまだ、ソウル・ウェポンの所得試験に合格してないッスから」

「所得試験？」

「知らないんですか？　なら、説明してあげるッス」

リンは得意げに説明を始めた。

「ソウル・ウェポンは、一定以上の力を持った者だけが得る事が出来る・・・。これはわかりますか？」

「ああ」

「なら、その一定以上の力っていうのはどう判断するのか・・・それを見極めるのが、所得試験ッス。毎年、一回だけ開かれて、それに合格した者だけが、ソウル・ウェポンを手にする事が出来るッス。これは、冒険者、傭兵、国の兵士関係無く、全員にチャンスがあるッス」

「そうなのか。・・・ん？　じゃあ、ルナ・・・第一皇女も試験を受けたのか？」

「王族の方達は特別ッス。みんな、確かめる必要もないほど、強力な力を持っておられるはずッスから」

「なるほど。わかる気がする」

「アタシ、去年も一昨年も試験に落ちちゃったんです。でも、今年こそ絶対に合格して、ソウル・ウェポンを手にしてみせるッス。そ

していつか、ルナトリア様のお傍で戦うのがアタシの夢なんです」

「憧れてるのか？　ルナトリア様に？」

一応、様をつけて名前を呼ぶ清人。すると、リンは懐かしそうに話し始めた。

「それだけじゃないんです。実はアタシ、小さい頃、ルナトリア様に助けて頂いた事があるんです。忘れもしない、八歳の時ッス。アタシとお母さんは、用があって王都へ出かけたんですけど、その途中で、モンスターに襲われたんです。そこへ、偶然『シュレクの街』に向かわれようとしていたルナトリア様に出会って、助けてもらったんです」

「そんな事が・・・」

「あの時から、ルナトリア様は、アタシの命の恩人で、憧れの方なんです。だから、いつか、アタシが強くなったら、今度はアタシがルナトリア様のお力になりたいんです。アタシにとってルナトリア様は、まさに言い伝えのような救世主様なんです」

≪我はなんて無力なんだ！　力が・・・力が欲しい！　あの言い伝えの救世主のように・・・我自身が光となれるように！　我は・・・力が欲しい！！≫

「なんだ・・・ちゃんと光になれてるじゃないか」

「何か言ったッスか？」

「いや、何でも無いよ。頑張れよリン。俺も応援してるから」

「ありがとうッス！　って、お兄さんは受けないんですか？」

「もう持ってるからな・・・（ボソ）」

「はい？」

「何でも無いよ。それより、まだ『シュレク』の街にはつかないのかな？」

「そろそろ見えて来るはずッスよ。・・・・あ、ほら！」

リンがビシッと前を指差す。遠目にだが、街のようなものが見える。

「さあ、行くッスよお兄さん！」

「ちょ、待ってくれリン！」

「全速力で走るッスよーーーーッ！！」

砂煙を巻き上げながら、走り去って行くリン。清人も慌ててその後を追いかけた。それから十数分後、二人は『シュレク』の街に到着した。

「到着ッス～～～！」

「はあっ・・・はあっ・・・つ、疲れた・・・」

「ギルドはこっちッスよ」

リンに案内され、清人はギルドへ入った。そして、カウンターに向かい、ギルドカードを提出して、受付嬢に話しかけた。

「すみません、王都から小包を届けに来たんですが」

「依頼の品ですね。はい、確かに受け取りました」

小包を受け取った受付嬢は、続けて袋を取り出した。

「こちらが、報酬の五百リラです。それと、リンドー様は、今回で規定回数の依頼を達成されましたので、FランクからEランクへ昇格となります」

「おめでとうッスお兄さん！」

「ギルドカードを更新しますので、このまましばらくお待ちください」

数分後、返って来たギルドカードは色々変わっていた。まず、名前の横のFがEとなっており、ギルドカード自体の色も、赤から青に変わっていた。

「これで、お兄さんもアタシと同じランクですね。これは、うかうかしてると抜かれちゃうかもしれないッスね」

「はは、そんな簡単に行けばいいけどね。さあ、依頼も済ませたし、王都へ帰・・・」

ギルドを出ようとしたその時、清人は小さな男の子とぶつかった。

「おっと、大丈夫か？」

「お兄ちゃん、ギルドの人！？」

「ん？　ああ、そうだけど」

「お願い！　妹を助けて！」

「どういう事ッスか？　詳しく聞かせて欲しいッス」

「妹がひどい熱を出して、すごく苦しそうなんだ！　けど、ウチにはお金が無くて、薬も買えない。でも、『氷の実』があれば、すぐに熱を冷ます事が出来るって聞いて！　それで、ギルドの人にお願いして、取って来てもらおうって・・・」

「『氷の実』？」

「『ギッヘルの森』の奥に実っている木の実の名前ッス。それを砕いて飲めば、どんな熱もたちまち下がるって言う実ッス」

「おう小僧、取って来てやってもいいが、俺達もタダじゃねえ。いくら出す？」

話を聞いていた別の冒険者が、男の子に尋ねる。

「い、今はこれしか・・・」

そう言って、男の子が取り出したのは、三十リラほどの小銭だった。それを見た冒険者は大声で笑い出す。

「おいおい！　んなはした金で『ギッヘルの森』に行けだ？　面白い冗談だな小僧！」

「ぼ、僕も頑張って貯めようとしたんだけど・・・これが限界だったんだ」

「話にならねえな。小僧、その金持ってとっとと消えな。こっちは、そんな下らねえ事に時間かけてるヒマは無いんでね」

「・・・下らないだと？」

「あん？」

清人が冒険者を睨みつける。その目はとても鋭く、明らかな怒りを表していた。

「妹の為に、精一杯のお金を集めて、助けを求めて来た相手に下らないだと？　よくもそんな事が言えるな」

「んだテメエ！　俺を“バイオレット・チェーン”のヘルマンだとわかって言ってんのか！！」

「知らん」

「んなっ！？」

「キミ、俺でよかったら、その依頼受けるよ。リン、悪いが先に王都へ戻ってくれ」

「ホントに！？　ありがとうお兄ちゃん！」

「・・・いや、アタシも行くッス」

「え？」

「そんな話聞いて、アタシが帰ると思ってるんですか？　嫌って言ってもついて行きますからね！」

「わかった。・・・ありがとう、リン」

「ケッ！　ソウル・ウェポンも持ってないヤツが、『ギッヘルの森』に行って生き残れると思ってんのか？　正気の沙汰とは思えねえぜ」

「そうか。なら・・・」

『ウイング・オブ・ガーディアン』を取り出し、冒険者の喉に突き付ける清人。

「これが、俺のソウル・ウェポンだ。これで文句は無いだろう？」

「ま・・・マジかよ・・・・」

清人達のやりとりを見ていた他の冒険者達も目を見開く。まさか、自分達より年下の、しかもEランクの少年が、ソウル・ウェポンを持っているとは思っていなかったのだ。

「それじゃあ、早速行って来るから、キミはギルドで待っててくれ」

「わかった！」

男の子の頭を一撫でし、清人達は、『ギッヘルの森』に実っているという『氷の実』を取りに再び出発した。冒険者達は、ただ無言で、二人の後ろ姿を見送ったのだった・・・

第七話　新たな出会い（後書き）

やっぱ、オリジナルって難しいですね。

第八話　深き森の中で

『シュレク』の街を出た二人は、もと来た道を戻り始めた。

「驚いたッス。お兄さん、ソウル・ウェポンをすでに持ってたんですね」

「ゴメンな、黙ってたりして」

「気にしないでください。それより、お兄さんが何で急に怒ったかの方が気になるッス」

「ムカつくんだ。家族の大切さを全然理解していない連中を見ると・・・」

両親を早くに失い、この年まで大切に育ててくれた祖父母も亡くした清人は、“家族”というものに特別な思い入れがあった。そんな清人にとって、あの冒険者の言葉はどうしても我慢できるものではなかった。

「家族ッスか。お兄さんの家族の方は、きっと素敵な方達なんでしょうね」

「ああ・・・本当に優しい二人だった・・・・」

かつての祖父母の優しい笑顔を思い出し、清人もまた笑顔を浮かべた。

「そろそろ嘆きの橋ッスね。『ギッヘルの森』は、そこから道を外れて、南に進んだ所にあるッス」

リンの言う通りに歩いて行くと、やがて二人の前に、深い森が見えて来た。入口らしき所には、ボロボロになった看板が立っており、リンは、かろうじて『ギッヘルの森』と読み解いた。

「ここが『ギッヘルの森』ッス。ここには、『レベル一』だけでなく、『レベル二』のモンスターもたくさん生息してるッス。さらに、奥の方には、『レベル三』のモンスターがなわばりを作っているって噂ッス」

「その奥に『氷の実』があるんだろ？　なら、行くしかない」

「わかってるッス。けど、もし『レベル三』のモンスターに出会ってしまったら、『氷の実』は諦めてすぐに逃げるッスよ？　いくらお兄さんがソウル・ウェポンを扱えるほど強くても、一人じゃ危険過ぎるッス」

「そうだな。気をつけて進もう」

リンの言う通り、一人で戦うのは無謀だ。ヘルギガンテスは、ルナトリアの援護があったから倒せたのだから。

それぞれ武器を抜き、二人は『ギッヘルの森』へと足を踏み入れた。

「少し寒いな」

進み始めてすぐ、まわりの温度が下がった。大量に生い茂った木々が、陽の光を完全に遮断していたのだ。薄暗い森の中に、様々なモンスターの鳴き声が響き渡る。

「う、うう・・・怖いッス～～～」

寒さではなく、恐怖で震えながら、リンは清人の腕にしがみついた。十四歳にしては、やや発育のよすぎる一部の感触が、否応無く清人の腕に伝わって来る。

「り、リン？　そんなにくっつかれたら、歩き難いんだけど」

「アタシ、こういう暗い所苦手なんです・・・」

「ギャアアアアアアアア！！」

「ひゃわぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？！？！？」

「お、落ち着けリン！　モンスターだぞ！！」

悲鳴のような鳴き声と共に現れたのは、人型の上半身に、蛇の下半身を持つ『レベル二』のモンスター・・・グリーン・ナーガだった。

「あ、ほ、ホントだ・・・。お、おのれぇ！　よくも驚かしてくれたッスね！　こうなったら、『レベル二』だろうと関係ないッス！　アタシがやっつけてやるッス！！」

「ギャアァァァァァァァァ！！」

「とりゃ～～～～！！」

グリーン・ナーガの尻尾攻撃を難なくかわしたリンは、そのまま反撃の横薙ぎを放った。グリーン・ナーガの腹に一筋の線が出来たかと思った次の瞬間、そこから体液が吹き出した。

「援護するぞリン！」

すぐさま清人も援護に入った。『ウイング・オブ・ガーディアン』で、グリーン・ナーガの右肩を貫く。

「ギャア！？」

「どっせーーーーいっ！！！」

そのまま力任せにグリーン・ナーガを持ち上げ、反対方向の地面に叩きつけた。脳天から叩きつけられたグリーン・ナーガは、ふらふらと目を回している。

「これで止めッス！」

最後の一撃とばかりに、全力で振り下ろされた双剣が、グリーン・ナーガの命を狩り取った。目の光が消え、グリーン・ナーガは、ゆっくりとうつぶせに倒れた。

「ふう、お疲れ様リン」

「お兄さん凄いッス！　あのグリーン・ナーガを持ち上げちゃうなんて！　やっぱり、ソウル・ウェポンを持つ人は違いますね！」

「いや、まだまだだ。もっと強くならないと」

「お兄さんは向上心が強いんですね。そういう人は伸びるってお父さんが言ってたッス」

「はは、ありがとうリン。さあ、モンスターも倒したし、先に進もう」

「了解ッス！」

再び、森の奥を目指し始める清人とリン。だが、本当に大変なのは、むしろこれからだった。

「「「「「プギャアアアアアアアアアアアアアア！！」」」」」

「オークってのはこんな所にもいるのかよーーーーーっ！！」

「い、いいから逃げるッスよーーーーーっ！！」

知らずの内に、オークの巣に侵入していたり・・・

「お、池があるぞ。ちょうど喉が渇いてたんだよな」

「それは毒池ッス！」

「ぶーーーーーっ！！！」

毒水を飲もうとして死にかけたり・・・

「あれ？　ここって、さっきも通らなかったか？」

「言われてみればそうですね」

「もしかして・・・迷った？」

「・・・・多分」

似たような場所をひたすら彷徨い続けたり・・・

そんな紆余曲折を経ながらも、二人は着実に『氷の実』に近づいていた。そして、森に入って約三時間が経過した頃、二人は、広場のような場所へ出た。

「ここは・・・」

その広場には何もなく、ただ一つ、中心に大きな木が生えているだけだった。そして、その木は、冷たい冷気を放っていた。これこそ、二人が探していた、『氷の実』を実らせる木・・・『氷結の木』だった。

「やったッス！　あの木に実っている実こそ、『氷の実』ッス！」

「そうか！　よし、早速取りに行こう！」

「はいッス！」

二人が『氷結の木』に駆け寄ろうとしたその時・・・上空から巨大な影が舞い降りて来た。

「クエェェェェェェェェ！！」

「なっ！？　うわぁ！？」

その影が巻き起こした強烈な突風が、二人の体を紙屑のように吹き飛ばした。そしてその影は、『氷結の木』の前にゆっくりと降り立った。

「げ、ゲイル・ファルコン・・・！　き、来たッス・・・『レベル三』のモンスターッス！！」

鋭いクチバシ、巨大な足爪、刃のような翼、そして、得物を決して逃がさない漆黒の瞳。このモンスターこそ、『レベル三』の鳥類型モンスター・・・ゲイル・ファルコンだった。

「クエェェェェェェェェ！！」

ゲイル・ファルコンは、その強靭な翼を羽ばたかせ、上空へ大きく舞い上がった。たったそれだけで突風が発生し、『氷結の木』を大きく揺らした。

「まずいッス！　ここはゲイル・ファルコンのなわばりッス！　逃

げるッスよお兄さん！」

「駄目だ！　せっかくここまで来たんだ！　なんとしても『氷の実』を取って帰るぞ！！」

「何言ってるんですか！　『レベル三』ですよ！？　勝てるわけないッス！！」

「目的は『氷の実』だ！　別に、あいつを倒す必要はない！」

清人は再び『氷結の木』へ向かって走りだした。だが、ゲイル・ファルコンもまた、清人へ向かって一直線に突っ込んで来た。

「危ない！」

「クエェェェェェェェェェ！！」

「この野郎！　邪魔するな！！」

『ウイング・オブ・ガーディアン』を構え、清人は必殺の一撃を放った。

「ヴァイタル・ペネトレイション！！」

しかし、ゲイル・ファルコンに穂先が突き刺さりそうになった刹那、

何かの力で、無理矢理軌道が逸らされ、清人の一撃は、虚しく空を切った。反対に、ゲイル・ファルコンの爪が、清人の頬を切り裂いた。

「痛っ！！」

倒れ込む清人。ゲイル・ファルコンは再び上空へ舞い上がり、こちらの様子を伺いながら旋回を始めた。

「大丈夫ですかお兄さん！？」

リンが慌てて清人を助け起こした。

「ああ、何とか。くそっ、倒せたと思ったのに、急に『ウイング・オブ・ガーディアン』が曲がって・・・」

「それはきっと、ゲイル・ファルコンのウインドシールドの所為ッス」

「ウインドシールド？」

「はいッス。ゲイル・ファルコンは、自分の周囲に、風のシールドを展開させてるんです。生半可な攻撃じゃ、そのシールドに防がれて本体に届きません」

「何か対処法は？」

「ウインドシールドを超える力で攻撃するか、シールドの弱い所を探し出して、ピンポイントで攻撃するか・・・二つに一つッス」

だが、先程の様に、『ウイング・オブ・ガーディアン』の攻撃では、シールドは突破出来ない。つまり、前者は不可能。それに、不可視のシールドの弱い所を探し当てるなど、何か特殊な能力でもない限り無理だ。なので、後者も不可能。

「八方ふさがりかよ・・・！」

「クエェェェェェェェェェ！！」

ゲイル・ファルコンが清人を捉える。その目は、活きのいい得物を前にして、どこか、喜悦を含んでいるように見えた・・・

第九話　猛撃する疾風（前書き）

先に言わせて頂きます・・・私はシリアスが苦手です。

第九話　猛撃する疾風

ゲイル・ファルコンが動く。翼を広げ、清人に向かって凄まじい速度で迫る。その速さは、まさに『疾風』の名に相応しいものだった。

「クエェェェェェェェェェ！！」

「くっそお！！」

負けじと『ウイング・オブ・ガーディアン』を突き出す清人。だが、結果は先程と同じだった。ゲイル・ファルコンのウインドシールドが、紙一重で穂先を逸らす。そのまま、清人は正面からゲイル・ファルコンの突撃を受けた。

「ぐあぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

清人は広場の端まで吹き飛ばされ、木に叩きつけられた。生まれてから今までに味わった事のないような激痛が全身を襲う。

「こ、このスキに・・・！」

清人がゲイル・ファルコンを引きつけている所を狙い、リンは『氷結の木』に走った。しかし、ゲイル・ファルコンはそんな二人の作

戦を嘲笑うかのように、彼女に向かって数十枚の羽を飛ばした。

「きゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

飛ばされた羽の数枚が、リンの足や手を切り裂いた。ゲイル・ファルコンの羽は、一枚一枚がとても固く、鋭い。それを使って得物を仕留めたりするのだ。

「クエェェェェェェェェェェェ！！」

「あ・・・」

リンの前に、ゲイル・ファルコンが降り立った。このまま、彼女に止めを刺すつもりだろうか。対するリンは、『レベル三』のモンスターが目の前にいる事に恐怖し、固まっている。

「うおぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！」

それを見た清人は、歯を食いしばって『ウイング・オブ・ガーディアン』を投擲した。当然のように避けられたが、結果として、ゲイル・ファルコンは空中へ逃げ、リンは無事だった。

「大丈夫かリン！？」

「は、はい。ありがとうございましたお兄さん。おかげで助かりました」

「怪我はどうだ？」

「大丈夫ッス。見た目ほど酷い怪我じゃないッスから」

「そうか、よかった。しかし・・・こりゃマジでヤバいな」

二人は空を見上げた。ゲイル・ファルコンは、時折鳴き声をあげながら、旋回を続けている。

「どうやら、『氷結の木』に一定以上近付いた対象を攻撃するみたいッスね。逆を言えば、不用意に近付きさえしなければ、襲われる事もないって事ッス」

「しかも、攻撃が終わる度に、ああやって空に上がっちまう。これじゃあ手出し出来ねえ」

「とにかく、一度体勢を立て直しましょう。お兄さんもさっき、強力なヤツ喰らったでしょう？」

「そうだな」

二人は広場を出て、木の裏に回り込んだ。そこから顔だけ出し、ゲイル・ファルコンの様子を伺う。攻撃対象がいなくなったからか、

ゲイル・ファルコンは、『氷結の木』の前にゆっくりと降り立った。

「しかし、何でこんな場所をなわばりにしてるんだ？」

「わかんないッス。・・・・ん？」

「どうしたリン？」

「お兄さん・・・あれを見るッス」

リンが何かに気付いた。清人が彼女の指す場所を覗くと、『氷の実』が二つ、ゲイル・ファルコンの背中にポトっと落下した。その実を、ゲイル・ファルコンは勢いよく食べ始めた。

「なるほど、『氷の実』はゲイル・ファルコンの好物だったのか。だから、ここをなわばりに・・・」

「お、お兄さん。見るのはそこじゃないッス！」

「え？」

「いいッスか？　ゲイル・ファルコンは常にウインドシールドを展開してるんですよ？　木の実なんて触れただけで粉々になるはずッス。なのに、今、ゲイル・ファルコンの背中に落ちた『氷の実』は無傷ッス。つまり・・・」

「ッ！　あのゲイル・ファルコンの背中には、ウインドシールドが

展開されていないって事か！？」

「その通りッス！！」

思わぬ切っ掛けで突破口を見つけた清人とリン。ここからが本当の勝負だった。二人は再び広場へ足を踏み入れた。

「クエッ！？」

「よくも今まで好き勝手やってくれたな！　纏めてお返ししてやるぞ鳥野郎！！」

「アンタの弱点は見つけたッス！　もう負けないッスよ！！」

二人は目を光らせ、テンション高くゲイル・ファルコンに襲い掛かった。

「「背中見せ（ろや）（るッス）ーーーーーーッ！！！！」」

「クッ、クエェェェェェェェェェ！！」

二人のあまりに異様な雰囲気を感じ取ったのか、ゲイル・ファルコンは焦った様子で翼を羽ばたかせ、突風を二人に叩きつけた。

「ぬわ〜〜〜〜！！」

「あれ〜〜〜〜！！」

風に煽られ、地面をゴロゴロと転がって行く二人。だが、次の瞬間には勢いよく立ち上がり、もう一度ゲイル・ファルコンに挑んだ。

「「まだまだ（ッス）ーーーーーッ！！！！」」

「クエェェェェェェェェ！！」

「のわ〜〜〜〜！！」

「あわわ〜〜〜〜！！」

三度目・・・

「「どりゃあぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」」

「クエッ！　クエェェェェェェェェェ！！」

「「おのれ〜〜〜〜！！」」

四度目・・・

「「たあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」」

「クエクエッ！　クエ！！」

「「負けるか～～～～！！」」

全身ボロボロになりながらも、何度もゲイル・ファルコンの背中を攻撃しようとする清人とリン。ゲイル・ファルコンの方も、翼を羽ばたかせる事に疲れたのか、息が荒い。

「くそ、あの翼さえ封じられたら・・・！」

「・・・・そうッス。ここは森の中ッス。『氷の実』なんて珍しい物があるんだから、“あの実”だってきっとどこかにあるはずッス・・・」

「リン？」

「お兄さん！　アタシ、ちょっと探して来るッス！！」

突然踵を返し、森に向かって走り出そうとしたリンに、清人は戸惑いの声をあげた。

「探すって、何を？」

「もしかしたら、ゲイル・ファルコンの動きを封じる事が出来るかもしれないッス！　お兄さん、アタシを信じてください！！」

リンの目は本気だった。それを見た清人は、大きく頷いた。

「わかった・・・頼んだぞリン！」

「任せてくださいッス！」

元気よく返事をし、リンは森の中へ消えて行った。それを見送った清人も、改めてゲイル・ファルコンと対峙した。

「リンが戻って来るまで、俺一人で相手してやる！　焼き鳥にされたくなかったら、気合い入れてかかって来いやぁ！！」

「クエェェェェェェェェェ！！」

“焼き鳥”という単語が不快だったのか、ゲイル・ファルコンの目が大きく見開かれた。清人に向かって、突撃の構えを見せる。

「甘い！」

先程と同じスピードで迫られたにも関わらず、清人は突撃を簡単に

避けた。

「クエ！？」

「ふん！　どんなに速くてもな、動きがワンパターンなら簡単に避けれんだよ！！」

「クエェェェェェェェェェ！！」

自身の速さを貶されたのが理解出来たのかわからないが、ゲイル・ファルコンが怒りの咆哮をあげた。再び清人に襲いかかろうとしたその瞬間、両手一杯に、紫色の木の実を抱えたリンが戻って来た。

「お待たせッス、お兄さん！　さあ、ゲイル・ファルコン！　この『デロの実』を喰らうッス！！」

リンがゲイル・ファルコンに向かって、その実を一つ投げつけた。ぶつかる直前、ウインドシールドによって粉々になったが、中身の液体が、ゲイル・ファルコンの翼に付着した。

「クエ！？　クエェェ！？」

変化はすぐに起こった。付着した液体が真っ白に凝固し、翼の動きが目に見えて鈍くなったのだ。

「やっぱり効いたッスね！」

「リン、その木の実は一体？」

「これは『デロの実』ッス。この実の中の液体には強力な凝固作用があって、触れたもの全部カチンカチンに固めてしまうんです」

「よく見つけて来れたな」

「にへへ、アタシの故郷は、森の中にある小さな村なんです。子どもの頃から、いろんな木の実や草や花に触れて来ましたから、結構詳しいんですよ。『デロの実』の木は、いろんな所に生えてますから、この『ギッヘルの森』にもきっとあると思ったんです」

「よし、とにかく、これをぶつけまくって、動きを封じればいいんだな」

「そうッス！　思いっきり投げるッスよ！」

「クエ！　クエェェェェェェェェェ！！」

そして、二人による、ゲイル・ファルコン封じ作戦が切って落とされた。大量の『デロの実』を、これでもかと投げつける清人とリン。ゲイル・ファルコンの全身が瞬く間に白く染まっていく。

「おらおら！　どうしたゲイル・ファルコンさんよ！？　さっきま

での素早い動きが嘘みたいじゃないか！！」

「真っ白ッスね～～！　そっちの方がよく似合ってるッスよ～～～！！」

最早、形勢は逆転していた。というか、傍から見ると、弱い者イジメにしか見えなかった。実際、清人とリンの顔は、モロにイジメっ子の顔だった。

「ク・・・クエェ・・・・」

完全に動きを止めたゲイル・ファルコンが、弱々しい鳴き声をあげる。白い体は、まるで別のモンスターの様に見えた。

「ここまで来ると、別に背中を狙わなくても倒せるんじゃね？」

「そうッスね。実際、ウインドシールドも解除されてるみたいですし」

「それじゃ・・・やるか？」

「了解ッス」

二人は、ゲイル・ファルコンに向かって、それぞれ思いっきり武器を振り下ろした。

「「止め　（だ）（ッス）！！」」

「クエェェェェェェェェ・・・・！！！」

広場、そして、『ギッヘルの森』に、ゲイル・ファルコンの断末魔が響き渡る。それは同時に、清人達の勝利を意味していた。

「はあっ・・・どうにか倒せ・・・」

「お兄さぁぁぁぁぁぁん！！」

双剣を放り投げたリンが、清人に抱きつく。森の中を歩いていた時と同じように、柔らかな感触が清人を襲う。

「凄いッス！　凄いッスよぉ！！　アタシ達、『レベル三』のモンスターを倒しちゃいましたよ！？　しかも、たった二人で！　これってとっても凄い事ッスよ～～～～～！！！」

「い、いや、リンのおかげだよ。キミが『デロの実』を見つけてくれたから、倒す事が出来たんだ。キミが一緒について来てくれて、本当に助かった。礼を言わせてくれ」

「お兄さん・・・」

清人の言葉に、リンは感動した面持ちを浮かべた。それから、首を振って答えた。

「それは違うッス。お兄さんがアタシを信じてくれたから、倒す事が出来たんです」

「いや、リンが・・・」

「いやいや、お兄さんが・・・」

譲らない二人。だが、不意に互いにプッと吹き出した。

「じゃあ、お互い様だな」

「にへへ、そうッスね」

地面に寝転がり、空を見上げる二人。支配者のいなくなった空は、どこか優しげに見えた。

それから、『氷の実』を三つほど採取した二人は、意気揚々と『シュレク』の街へと戻ったのだった。

「お待たせッス！」

ギルドにはあの男の子がいた。どうやら、清人の言いつけを守って、ずっと待っていたようだ。

「お帰りなさい！　って、二人とも凄いボロボロだよ！？」

「色々あったからな。それよりほら、約束の『氷の実』だよ」

ウエストポーチから『氷の実』を取り出し、男の子に手渡す。

「これが『氷の実』・・・」

「さあ、早く家に帰るッス。妹さんが待ってるッスよ」

「うん！　本当にありがとうお兄ちゃん、お姉ちゃん！！」

報酬の三十リラを差し出し、男の子は勢いよくギルドを出て行った。数人の冒険者が騒ぎ出した。

「ほ、本当に『ギッヘルの森』に行ったのか・・・？」

「あれは間違いなく本物の『氷の実』だ。という事は・・・」

「ふ、ふん！　おおかた、金に物言わせて、王都辺りで買ったんじ

ゃねえのか！」

森に向かう前、二人に絡んだヘルマンが、負け惜しみの様にそう言った。その時、清人の懐から何かが落ちた。

「お兄さん、何か落ちたッスよ」

それは、ゲイル・ファルコンの羽だった。突撃を受けた時、衝撃で懐に入り込んでいたのだろう。

「ああ、ゲイル・ファルコンのヤツだな。いつに間に入ったんだ？」

「「「ゲイル・ファルコン！？」」」

『レベル三』のモンスターの名に、ギルド内がどよめく。

「あ、アタシも、倒した記念に一枚取ればよかったッス」

「「「倒した！？」」」

どよめきがさらに大きくなった。それに気付いていないのか、清人はその羽をリンに渡した。

「これでよかったらあげるよ」

「本当ですか！？　ありがとうございます！」

「それじゃ、『氷の実』も渡したし、今度こそ王都へ帰ろう」

「はいッス！」

二人はギルドを去って行った。そんな中、ある冒険者が一言・・・

「あ、あの二人・・・将来すげえ大物になるんじゃねえのか・・・・」

この冒険者は、ある意味優秀だった。何せ、彼の言葉は後に現実となるのだから・・・

第九話　猛撃する疾風（後書き）

とまあ、緊迫した戦いだったのに、やらかしてしまいました。ですが、これが私の作風ですので、どうかご容赦ください。

第十話　一日の終わりに

清人達が王都へ戻った頃には、辺りはすっかり暗くなっていた。明かりのついたギルドからは、賑やかな声が響いて来る。

「やっと戻って来れたな」

「アタシ、もうクタクタッスよ」

「これからどうするんだ？」

「そうですね・・・ギルドで夕食でも食べる事にします」

「夕食？　ギルドでご飯が食べられるのか？」

「それだけじゃないッスよ。冒険者の人達の為に、二階から上は宿屋になってるんです。アタシも、ここの三階の部屋を借りてるんですよ」

「へえ、そうだったのか」

「そうだ、お兄さんもどうですか？」

すでに城の夕食の時間も過ぎてしまっているだろう。そう判断した清人は、リンの誘いを受ける事にした。

「うん。じゃあ、ご一緒させてもらうよ」

ギルドに入った二人は、空いた席を見つけて腰をかけた。ジェシカを含めた数人の女性達が、客の注文を受けたり、料理を運んだりと忙しく駆け回っている。

「いらっしゃいませ。ご注文はお決まりですか？」

清人達に気付いた女性が、注文を取りに来た。

「アタシはもちろん『ジョモー牛のステーキ』ッス！　それと『カルメロ鳥のスープ』と、『コリの実のパン』。あと、食後のデザートに『コールドケーキ』をお願いします！」

「はい、かしこまりました。では、そちらの方は？」

「それじゃあ、俺もその『ジョモー牛のステーキ』ってヤツを」

「かしこまりました。それでは、少々お待ち下さい」

一礼し、女性は注文を伝えに奥へ引っ込んだ。

「一つしか頼まないなんて、お兄さん小食なんですね」

「いや、リンの方が食べ過ぎな気がするんだが・・・。よくあれだけ注文したな」

「そうッスか？　これくらい普通ですけど。それに、たくさん食べないと大きくなれませんし」

「そう言う割には、あまり成果が出てないようだけど」

清人はからかう様な口調でそう言った。すると、リンは自分の胸を下から持ち上げてポヨポヨと揺すった。

「そうなんですよ。それなのに、こっちの方ばっかり成長しちゃって・・・戦う時に邪魔になって困ってるんです」

「そ、そうか。じ、女性ってのは大変なんだな」

「あれ？　お兄さん、顔が赤いッスよ。どうかしたんですか？」

「な、何でもないぞ。ちょっと暑くてな。うん、それだけだそれだけ！」

「？」

「お待たせしました～～！」

料理が運ばれて来た。清人の前に、肉厚のステーキが置かれる。美味しそうな香りが漂い、思わず清人は涎を垂らしそうになった。

「それじゃ、お兄さん！　今日も一日、お疲れ様ッス！」

「お疲れ！」

ジョッキ（中は水）をぶつけ合い、一気に飲み干す二人。疲れた体に、冷たい水が一気に染み込んでいった。

「さあ！　食べるッスよ～～～！」

早速ステーキにナイフを入れるリン。切った肉を口にした瞬間、彼女はとろけるような表情を見せた。

「はう～～♪　相変わらず、このステーキは最高ッスね～～～！」

「そんなに美味いのか？」

清人も一口食べてみる。濃厚な肉汁が口いっぱいに広がり、肉自体が一瞬で溶けてしまったように錯覚するほど、簡単に噛み切れてしまった。

「美味っ！　何だこの肉！？」

城での食事でも、当然肉料理は出ていたが、それと同じくらい、このステーキの味は素晴らしかった。空腹が手伝っていた所為もあるが、そのあまりの美味さに、清人は軽く感動を覚えていた。

「リン！　これ滅茶苦茶美味い・・・」

「ふえ？　ふぁにふぁいいまふぃふぁふぁおにいふぁん？」

その感動をリンに伝えようと顔を向けると、彼女は頬をパンパンに膨らませて清人を見返した。

「あはは！　なんて顔してんだよリン！」

「ふぁ、ふぁふぃふぁらっへふんへすか！」

「いいから口の中の物飲み込めよ」

ゴクリと大きな音を鳴らし、リンは一気に食べ物を飲み込んだ。それから、淹れ直した水をまた一気に飲み干すと、やっと人心地ついたように息を吐いた。

「ふ～～～」

「そんなに慌てて食ったら腹壊すぞ？」

「大丈夫ッス！　アタシのお腹は鉄で出来てますから！」

「鉄って・・・（苦笑）」

「それよりお兄さん。全然食べてないようですけど、もしかして口に合いませんでしたか？」

「逆だよ。滅茶苦茶美味いよこの肉。それで、その事をリンに言おうと思ったら、あんな風な事になってたから」

「そうッスか！　お兄さんも『ジョモー牛のステーキ』が気に入ったみたいッスね！　それは何よりッス！」

「ああ、何枚でもいけそうだ」

「にへへ、アタシも調子のいい時は、三、四枚は余裕で食べられますよ」

「ははっ、それは凄いな」

それから食事を終えた二人は、一時間ほど、互いの事やどうでもいいような事を話し合ったりして、ようやく食事会を終えた。食事代を払おうとした清人だったが、登録者は無料だという事を聞いて驚いた。なんでも、食材等は全て、依頼を受けた専門の冒険者達が集めて来た物を使っているので、払わなくていいらしい。

「って事は、ジョモー牛もモンスターなのか？」

「はい。『レベル二』ッス」

「やっぱり・・・。さて、それじゃそろそろお開きだな。リンはこの三階に泊まってるんだろ？　俺も自分の所に帰るよ」

「あ、じゃあ見送りさせてください」

二人は一度ギルドを出て、その手前で改めて向かい合った。

「今日は色々助かったよ。ありがとなリン」

最後に、清人は右手を差し出した。

「こちらこそ、いい経験をさせてもらったッス。またご一緒出来る時を楽しみにしてるッス」

リンも右手を差し出し、二人はしっかりと握手を交わした。

「ああ。次もよろしくな」

「はいッス！」

手を離し、清人は城への道を歩き始めた。そんな彼に、リンはずっと手を振り続けていた。

「ただいま戻りました」

城に戻った清人は、城門の門番に声をかけた。

「おお、リンドー殿。今日はまた、一段とボロボロですな」

この四日間、ここを通ってギルドへ通い続けていた甲斐もあってか、清人はすっかり門番と仲良くなっていた。

「ええ、ちょっとゲイル・ファルコンとかいうモンスターとやり合ったんで」

「ゲイル・ファルコン！？　『レベル三』のモンスターではないですか！　これは、ぜひともお話を聞かせて頂きたいものです」

「今度、時間のある時にでもお話ししますよ」

「お願いします。リンドー殿のお話はとても面白いですから」

城内に通された清人はそのまま自室へすぐに戻り、備え付けの浴室で、戦いで汚れた体をサッと流したあと、ベッドに倒れ込むように横になった。

「（今日の戦いは本当に危なかった。リンの機転がなければ、俺は間違いなくやられていた。今のままじゃ駄目だ。もっと・・・もっと強くならないと）」

ゲイル・ファルコンとの戦いは、清人の決意をさらに固くした。ルナトリアの為だけではなく、自分自身の為にも、清人は改めて強くなりたいと思った。

「Eランクにもなれたし、明日からはもっと色々な依頼をこなして・・・それで・・・・」

窓から入る月の光に晒されながら、清人は静かに眠りについた。

清人が眠りにつく少し前、ルナトリアは自室で就寝の準備をしていた。

「結局、今日はキヨトと一度も顔を合わせなかったな・・・」

その事に少しだけ寂しさを感じるルナトリア。しかし、何故そう感じるのかは、本人にはわからなかった。

「クレアやエミリエッタも、心なしか寂しそうに見えるが・・・いつに間に仲良くなったのだ？」

すると、今度は胸にモヤモヤした何かが生じた。だが、これも今のルナトリアにはわからないものだった。

「・・・まあいい。寝るか」

そう言って、ルナトリアはベッドに横になってしまった。彼女の疑問が解決するのは、これからずっと先の事になる・・・

第十一話　好敵手

ゲイル・ファルコンとの戦いからはや二週間が経過した。今日もまた、清人はリンと共に魔物退治の依頼を受けていた。

「そっちに行ったぞリン！」

「お任せッス！」

清人の叫び声に反応したリンは、背後から飛びかかって来た『レベル一』のモンスター、ポイズンスネークを振り向きざまに一刀両断した。中心から真っ二つになり、ポイズンスネークはその名の由来である毒液をまき散らしながら絶命した。

「今のやつで最後だな」

『ウイング・オブ・ガーディアン』を地面に突き刺し、清人はホッと息を吐いた。リンもまた、刃についた体液を飛ばし、双剣を鞘に収めた。

「さてと、目的も果たしたし、ギルドに戻るか。確か、ポイズンスネーク討伐の証明は、牙だったな」

ポイズンスネークの死体から牙を一本回収し、清人達はギルドへと舞い戻った。

・・・・・

「はい、確かに、ポイズンスネークの討伐を確認しました。報酬はこちらになります」

ジェシカから報酬を受け取る清人とリン。すると、リンが不満そうに口を開いた。

「ジェシカさん、もっと強い魔物の討伐依頼はないんですか。こんなんじゃ、物足りないッス！」

「ずいぶんやる気があるのねリンちゃん」

「そりゃそうッス！　何せ、所得試験も近いですから、少しでも強くなっておかないといけないんです！」

「あら、もうそんな時期なの」

「所得試験？」

初めて聞く単語に清人は首を傾げる。正確には二回目だが、清人はすっかり忘れていた。そんな清人に、ジェシカが優しく説明する。

「ソウル・ウェポンを手にする資格があるかどうか見極める試験の事です。試験内容は毎年異なりますが、それに合格すれば、ソウル・マテリアを与えられるのです」

「ソウル・マテリアって？」

「ソウル・ウェポンの原形ともいえる珠の事です。それにソウル・ネームを与える事で、晴れてソウル・ウェポンになるのです」

「なるほど」

「あれ、お兄さんソウル・ウェポン持ってるのに、何でそんな事聞くんですか？」

リンは不思議そうに尋ねた。清人は正規の方法でソウル・ウェポンを入手したのではなく、反則的に入手したのだ。ソウル・マテリアの事など知るはずもない。

「え？　あ、それはだな・・・そう！　ド忘れしてしまってな。うん、思い出した、ソウル・マテリアだな」

清人は何とかごまかそうと言い訳した。彼がこの世界の住人ではない事はルナトリアから固く口止めされていた。

≪よいかキヨト、近い内にそなたが救世主である事を正式に国民に発表する。それまでは決して自分の正体を明かしてはならんぞ。余計な混乱は招きたくないのでな≫

ボロを出さないうちに、清人は話を変えた。

「そうか、最近他の冒険者達がやけに気合い入っていたのは、所得試験が近かったからか」

「そうですね。毎年、この時期はモンスター退治の依頼にみなさん殺到するんです。試験の為に、少しでも力をつけたいからって」

「アタシだって、今年こそは合格してみせるッス！　三度目の正直ッスよ！」

瞳を燃やし、高らかに宣言するリン。そんな彼女に、どこからか声がかけられる。

「お～っほっほっほ！　また今年も無様な姿をさらすおつもりなのかしら、リン・オルト！」

「こ、この声は・・・」

バッと振り向くリン。清人がその視線を追うと、椅子に座り、優雅にカップに口をつけている少女がいた。紫色のショートヘア、上半

身にレザーアーマーを纏い、下半身は青いスカート、黒い二ーソックスが足を覆っている。彼女の傍には、燕尾服を着た青年が立っている。

「やっぱりアンタッスか！　フィアナ・クオンターレ！」

「ふふ・・・」

フィアナと呼ばれた少女が立ち上がり、リンの前にゆっくりと近づいて来た。燕尾服の青年もその右後ろに控える。

「二年続けて不合格でしたのに、まだソウル・ウェポンを諦めていなかったんですのね」

「アンタだって同じじゃないッスか！」

「うっ・・・こ、今年は違いますわ！　今年こそはわたくし、絶対の自信がありますのよ！」

「アタシだって、今年こそ絶対合格してやるッス！」

「無理ですわね！」

「無理じゃないッス！」

顔を突き合わせ、「う～～」と唸るリンとフィアナ。清人は当然の

ように尋ねた。

「リン、この子は？」

「知らないッス！　赤の他人ッス！」

「いや、どう見ても知り合いに見えるけど・・・」

「あなたは？」

フィアナの視線が自分に移ったので、清人は自己紹介をする事にした。

「俺の名前はキヨト・リンドー。一応は冒険者・・・かな」

「わたくしはフィアナ・クオンターレ。誇りあるクオンターレ家の長女ですわ。ソウル・ネームは『ボルテック・パニッシャー』。そしてこちらが・・・」

「お初にお目にかかります。ロイド・バーンズと申します。畏れ多くも、フィアナお嬢様の従者をさせて頂いております。ソウル・ネームは『ケルベロス・ストーム』でございます」

恭しく一礼するロイドに、清人も思わず頭を下げた。

「よかったですわねリン。あなたみたいな子と一緒にパーティーを組んでくれる奇特な方がいて。・・・といっても、あまり頼りになりそうには見えませんけど」

「アタシの事はともかく、お兄さんを馬鹿にするのは許さないッスよフィアナ！　それに、お兄さんはすでにソウル・ウェポンを持ってるんスからね！」

予想外だったのか、フィアナは軽く目を見開いたが、すぐに平静を取り戻した。

「まあいいですわ。それなら、合格出来るよう精々そのお方に鍛えてもらいなさい。行きますわよロイド」

出入り口へと歩き始めるフィアナ。ロイドは「失礼いたします」と再び一礼し、主と共に扉の向こうへ消えて行った。

「何だったんだ・・・」

「あーーもう！　相変わらずムカつく女ッスね！」

リンとフィアナの出会いはずいぶん前に遡る。奇しくも、同じ日にギルド登録を果たした二人は、何かにつけて張りあうようになった。片方がモンスターを討伐すれば、もう片方が同じモンスターを三体討伐する。すると、今度はまたもう片方が五体討伐する。そうした

結果、二人はランクに見合わない強さを身につける事となったのである。

「ライバルってやつか」

「そんなんじゃないッス。ただ、アタシはフィアナだけには絶対負けたくないんです」

・・・・・・

「・・・なんて事があったんだ」

その日の夜、ルナトリアの部屋に招かれた清人は、昼間の出来事を話した。

「ほお、クオンターレの長女か。それに、あの時の娘も・・・」

「あの時の？　ルナ、もしかして憶えてるのか！？」

「当然だ。愛する民の事だからな」

六年前の、それも、たった一人の民の事を憶えている。清人は、ルナトリアが本当に民を大切に思っているかを改めて思い知った。

「ふむ・・・今年の試験は少し趣向を変えてみるか・・・」

「ん？」

「独り言だ。気にするな」

「ところで、さっきから机に向かって何やってるんだ？」

「手紙を書いているのだ。隣国の友人にな」

「隣国？　もしかして、その友人も王族？」

「その通りだ。よくわかったな」

これからしばらくして、清人はその『友人』と顔を合わせる事になるのだが、もちろん、今の彼には知る由も無かった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5750v/

中二な世界に飛ばされて

2011年12月14日00時52分発行